332-212

佐佐木信綱著

和歌入門

東京 博文館藏版

治
1. 12

和歌入門　目次

序……一
第一編　詠歌の精神……一九
第一章　歌ごころ……一九
第二章　歌集を讀むこと一……二五
第三章　歌集を讀むこと二……四五
第四章　觀察及び感味……六一
第二編　作歌法……七七

和歌入門
第一章　構想と題詠……八〇
第二章　語句と調……一〇〇
第三章　文法と修辭……一一九
結論……一三五

附錄

歌題と作例……一
歌會と書式……八七
本居宣長色紙……一
香川景樹懷紙……二
蓮月尼懷紙……三
賀茂眞淵短册……四
井手曙覽短册……四
木下孝文折詠草……五
村田春海竪詠草……六

目次終

和歌入門

佐佐木信綱著

序

一

題して和歌入門といふが、專ら短歌を詠む上の注意に就いて說く。蓋し和歌といふ中には、短歌の他に、長歌も、旋頭歌も、また今樣歌もあるが、最も今の世に行はれて居るのは短歌であるからである。

世界いづこの國民でも、詩歌を有しないものは無い。併し日本の國民のやうに、國民一般に行渡つた文學的の詩歌を有してゐるものは、他に無いであらう。それは何の故であるかといふと、我が國には、短歌といふ便利な、まとまつた良い詩形が有るからである。我が國にかういふ詩形が發生し發達し來つたわけはと言へば、或は日本の國民の趣味性が、特に優美といふ方面に發達して居たとか、或は日本の國土の風景が、同樣に優美の趣に富んで居るとか、或は日本の國語の性質が、斯かるまとまつた短い詩形を成すやうになつて居るとか、樣々の理由が有らう。それをここで委しく考へる必要は無いが、兎に角我が國には、殆ど歷史と共にこの短歌があつて、國民の間に廣く行はれ、特に歌人といふ專門家を生じた後も、一般の敎育ある人士の間に行はれたのみならず、和歌を詠むことが、國民の敎養の一つの輕からぬ要素となつて居たことは、歷史上の事實に徵してわかる。遠き上代はいふに及ばず、奈良朝の時代まで、和歌は殆ど國民全體が之を詠んで居た。これは日本紀古事記萬葉集等の歌を見れば明らかである。平安朝以後、卽ち古今集後になつて、和歌は幾分上流の占有物とならうとする傾を生じて來た。が併し、文字ある階級の人々には廣く行はれて、敢て專門少數の歌人のわざとのみなりゝゐなかつた。武人が政を執るやうに成つてから、彼等の間に修養の具として和歌が重んぜられたことは、足利

時代に著しかつたことで、太田道灌の如きは、人も知る如く、歌に關する多くの逸話を傳へられて居る。文敎地を拂つた戰國時代の武士が、和歌を詠むことを武人の心得のうちに數へたことは、北條早雲や武田信玄などの家法に記されて有る。德川時代から、儒敎が敎育の全權を握るやうになつたが、それでも猶この傾向は衰へなかつた。その頃から和歌と並んで大いなる勢力を得て來た俳句も、もとは和歌から出たものである。

馴れればその價値を忘れがちなのは人情の常である。もし日本以外に和歌の如き詩を有し、日本人の如く、ある意味で國民一般が詩人であり歌人である國民があつて、日本に斯ういふ事が無かつたとしたならば如何。吾人はその國民のまれなる幸をたゝへ、その歌に對して深い興味をいだき、尊敬の念を覺えざるを得ないで有らう。日本國民が和歌を有することは、日本國民の特質である。否、誇るを得、喜ぶを得る特質である。

併し、日本國民本來の斯くの如き特質と美質とは、果して今日に於いても一般に傳へられて居るであらうか。否、世の文明と共に、益々發達せしめられ、益々敎育されて行つてゐるであらうか。吾人は疑なきを得ない。和歌は比較的盛んに

行はれて居る。併し、眞に歌の意義を解し、眞に歌を愛し、眞に歌を樂しんで居る人は、果して多くあるであらうか。此昔ながらの形式に新しい感情思想を盛つて、明治の生命ある和歌を詠まうとする人たちの努力も、一方に認められて居るが、それと共に、一方には今なほ舊態を守つて、固陋の考に囚はれて居るものがある。それらの勢力は中々大きい。之に對して、所謂新しい派の人々の中にも、歌に對する考の正鵠を失して居る爲に、不知不識岐路に陷つて居るものがある。況して一般の人々に於いては、或は和歌を解せずして我が國民の昔ながらの美質を忘れたものか、然らずば、志は有りながら就いてよるべき途を知らず、徒らに多岐多樣なる和歌の巷に立つて進み兼ねて居る、これ十に八九は然る所である。

固より國民全體が詩人になり歌人になる必要は無く、又それは出來ないことである。併し、國民全體が詩を解し歌を解するやうになることは、まことに望ましいことである。勿論人それ〴〵に各自の盡すべき任務を有して居るのは言ふまでも無いが、更に進んで、國民全體がその各自の專門の職業のほかに、ある程度まで歌人となり詩人となることは、望ましいことである。それによつて國民の氣品はいかに高められ、國民の感情はいかに清められるであらう。

趣味の敎育の必要といふことは、近來往々注意されて來た

所である。興國の機に際し、物質上の文明の發達が益々盛んな結果として、實利の方面に發達してゆくあまり、殺風景になつてゆく傾向の免れがたい今の世の中の弊をふせいで、趣味に富める人、趣味に富める家庭、趣味に富める國民を作らねばならぬと思ふ。その趣味教育の手段として、最も良きは、即ち和歌の普及である。和歌には前に述べた如く、建國以來の歴史がある。この歴史は決して輕んずべきもので無い。殊に趣味の教育などいふことは、さう早急にとつてつけたやうに出來るものでは無い。この歴史的の事實をもととして施すが最も良いと思ふ。この點から言つても、和歌の普及は望ましい。吾人は、和歌を解し和歌を味ふ人が、我が國民の間に益々多く出て、趣味ある家庭、趣味ある國民の實現されむことを欲する。而して斯かる家庭、斯かる國民の中からこそ、大なる文學も生ずるのである。

而して眞に和歌を解し得、味ひ得るに至るには、單に和歌の如何なるものなるかを知るだけでは不十分で有る。ある程度までは、自分が之を詠み得るやうにならねばならぬ。音樂や繪畫でも、實際自分で彈じたり畫いたりすることは出來ないでも、すぐれた批評力を持つて居る人は無いではないが、大體に於いて、さういふ人の多くは、自分自らでも、或る程度まで彈じ得、畫き得る人である。和歌に於いても同じであ

る。自分で作り得る人で無ければ、眞の歌の味ひは分りにくい。作者の心持に同情し、歌の情味に同化して、單に頭で知るばかりでなく、心情で味ふといふ爲には、どうしても自分が作る人で無ければならぬ。

吾人が本書で述べようとする入門は、斯かる考へから、一般の人の間に和歌を普及せしめようとの目的のもとに書き記すものである。隨つて本書に述べるところは、名の示す如く專ら和歌の門に入る人の手引である。殊にまた、歌學もしくは古歌の研究の手引では無くて、主として詠歌の爲の手引である。理を說くよりは、寧ろ實際の經驗に訴へて、和歌の詠み方を說くを主とし、かねて詠歌の感興を惹起させようとしたものである。

二

我々は、まづどういふ動機から歌を詠み初めるに至るかといふと、人々によつて樣々であるが、吾人が親しい人々に就いて經驗した二三の場合について語つて見よう。

これはさる婦人の例であるが、その人は夫に先だたれ子もなくて、寂しい境遇になつた人である。これまで文學の樂しみなども別に無かつた人で有つたが、ふと雜誌か何かで、自

分と似たやうな境遇のさる婦人の身の上を歎いた歌を讀んだ。すると、何とも言へない慰藉を感じた。親切に慰めて呉れる人の詞よりも、遙かに深い慰藉を感じた。そこで他人の歌を讀んでも斯うであるから、自分で心の中にこもつて居る感情を洩らして見たらば、どれほどの慰めを得られるであらうと思つて、歌を詠んで見ようと決心したといふのがある。

又これはさる多忙な實業家の例である。毎日朝から晩まで劇務に追はれて居るのが常であるが、長い旅行の汽車の窓から、海や山の美しい眺望に接した時、また夜遲く歸る車の上で、星の輝いた空を眺めた時、この多忙なる人の心の中にも、これを歌に詠んで見たらばといふ念が萠し初めて來た。それが終に和歌を詠み習つて見ようといふ考になつた。

これはさる軍人の例である。平生文學などは殆ど顧みない武骨一遍の人であつたが、日露戰爭に從軍した時、ある戰の夜、終日惡戰苦鬪して、終に敵の陣地をぬき、敵軍を退却させた夜の事であつた。恰も十五夜の月の光が、新らしい戰場のあとに耀いて居る。所狹き迄に亂れて居る敵味方の死骸の間から、蟲の鳴く音が悲しげに聞える。さすがに勇ましい武士の心にも、故郷のことや、討死した戰友や、敵兵のことが思はれた。斯かる時に人は歌や詩を作るもので有るかと思つ

たのが動機で、それから歌に志した。

なほ其他にも、或は學生時代には文藝方面の趣味などは知らず、專ら學業に勤しんで世に出たさる汽船の汽關士をして居る人が、遠洋航海の時、大洋の果に眺めた夕日の美しさにふと歌心をおぼえてから、道に志さうと思ひ立つて、吾人の許に名簿を送り、今なほ引續き詠み習つて益々上達してゐる人も有る。また深い專門の研究に從つて、學理の研鑽に頭をいためてゐる學者の、理を究め微を探る心の活きの轉化の間に、ふと窓前の草花の可憐なのに心が動いて、歌に志し初めたといふ人も有る。又立派に妻たり母たるつとめを果した老婦人が、餘生を靜かに送りたいといふ考から和歌に志した人もある。看護婦の務にあつて、夜の目も寢ずに、病人の看護をして居る身の、病床によつて病人の眠つて居るのをまもつて居るひまに、ふと歌心をおぼえたといふのもある。斯かる特別の機會に際したといふでは無く、たゞ友人の中に歌を嗜なむ人があるにすゝめられて、詠んで見ようといふ心になつて歌に志したといふ人も勿論多くある。

而してこれらの人々は、等しく初めて歌を詠まうといふ人であるが、然も、その學才とか素養とかに於いて、色々の差別がある。自分でこそ作つたことは無いが、これまで新聞雜

誌また書物などで、古今の人の歌を讀んで居たといふ人もある。父母とか知己とかに、その趣味のある人があつて、その話などを聞いて居て、自然歌心が養はれて居る人もある。又生れながらに卓れた才を持つて居る人もある。その人々によつて、いよ〳〵道に入り立つに就いて難易も樣々ある。併し、是等の人のいづれを問はず、まづ歌に入らうとする人の爲に、第一に必要なことは、歌心を養ふといふことである。換言すれば、詠歌の準備をなすといふことである。歌を詠むには、まづ歌を詠む心持を養はねばならぬ。樣々の事物に觸れて、それを深くも細かにも、自然、歌として詠み出せるやうに感じなければならぬ。また單にそればかりでは無く、事物に接してそれを歌となし得るやうな感情を創り出すやうにならなければならぬ。これが詠歌の根本である。而して第二には、斯ういふ風に養はれた感情を、いよ〳〵三十一文字の歌に作り出す爲に、特殊の技巧を學ばなければならぬ。單に心持だけが歌になつても、それを歌として言ひ表はす術を學ばなければ歌は出來ぬ。これが實際の詠歌にはまた大切な要件である。

こゝに於いてか、吾人がこれから述べようとする入門は、自然と二つの部門にわかれる。卽ち、第一に、詠歌の精神として歌心を養成するに必要な事柄を說き、第二に、和歌の作

法として調子や詞の上の注意を説く。而して最後に和歌の教養上の意義如何といふことに就いて、些か吾人の考へて居る所を述べよう。

第一編　詠歌の精神

第一章　歌ごころ

古歌に、「心あらむ人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを」といふのがある。この「心あらむ人」といふのは、單に有情の人といふだけの意味では無い。また、有識者具眼者といふのでも無い。卽ち、此美しさを美しと感ずる人といふ事で、つまり、歌を解し、歌を詠み得るほどの心のある人といふ事となる。此心あると云ふ事は、また古來用ゐられた外の語で云へば、物のあはれを知るといふ事である。

此、心あると心なしとで、歌は詠まれもし、詠まれもせぬ。

同じ山水の美しさ、月花の美しさを見ても、格別美しとも感ぜず、感ずべきこと、動かさるべき事に接しても、心を動かさない人は、歌は出來ぬ。まづ第一に、感ずべき事物に觸れて感じ得る心がなければ歌は出來ぬ。それ故に、津の國の難波の春の美しさを見ても、海邊の海士は歌を詠まぬのである。之に反して、西行が、「心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕ぐれ」と詠んだのは、世俗の欲情に動く心こそ無かつたものゝ、鳴の立つて行く澤邊の秋のあはれに感ずる心は、中々に彼の深く有してをつた所であるからである。

この事物に感ずる心は、もとより人間自然の感情である。人間として喜怒哀樂の感情を有しない者の無いのは、人間として歌心を全く持つて居ない者の無い事を示してゐる。詩歌は人間の感情の聲である。また自然の聲であるといふのは、この故である。

併し普通の喜怒哀樂の感情そのまゝが歌心であるとはいへぬ。喜怒哀樂の情は誰でも感じて居る。併しそれにも拘らず、或一部の人だけ歌を詠んで、一般が歌をよむことが出來ぬのは、一つには歌を詠む術を知らない故であるが、一つには實にこの歌心が無いからである。歌心を養ふといふ事が、特に必要に成つて來るのは、此故である。歌心と實際の感情との違ふ理を精しく説明するのは、本書の任務では無いが、簡單に言へば、歌ごころとは、我々が普通の感情を、更に、美し

いとか、あはれとか感ずる心である。單に喜怒哀樂とか、好惡を感ずるばかりでは、歌にならない。更にそれを、一種の餘裕のある心持でながめみて、あはれとか美しいとか感ずるに至つて、はじめて歌が出來るのである。勿論實際の感情が歌心になるといふ經過は、極微妙で、既に幾分歌を詠み慣れた人々にとつては、大抵の場合に於いて、殆ど不知不識の間に實際の感情が歌になつてゆくので有る。が併し、始めて歌を詠まうと言ふ人にとつては、さうはゆかぬ。

隨つて、歌を詠まうとするには、まづ第一にこの歌心を養成するのが必要である。否、歌心を養成するといふ事は、殆ど同時に歌を詠むといふ事である。それならば、この歌心を養成するには、どうしたらばよいか。これこそ吾人の述べなければならない所である。之が分つてくれば、歌心のどんなものと云ふ事は、自然わかつて來るのである。

歌心を養ふには、まづ古來の歌集や歌論を讀んで、多くの歌人の經驗に親しみ敎へらるゝのが必要である。併し單に他人に學ぶだけでは足らぬ。それと共に、平生見聞し遭遇するところの自分の經驗を省み味つて、自ら工夫してゆかなければならぬ。而して、これには常に自分の心の內の感情や外界自然の事柄の間に歌になりさうな趣を注意し、觀察して、見出すにつとめるのが必要である。

これからそれらの點に就いて、一々述べて見よう。便宜の爲め、まづ歌集を讀むことから述べる。

第二章　歌集を讀むこと　一

歌集とは、もとより和歌を集めた集であるが、大別すると、撰集と家集とがある。撰集とは多くの作家の和歌を、種々の標準から選び集めたもので、これにも、その撰集の公私の別から、勅撰集と私撰集とがあり、また或は種々の題のもとに古來の歌を集めた類題集といふものがある。

勅撰集は、朝廷の命で選んだ集で、これには古今集を始めとして、廿一代集がある。私撰集にも多くの集がある。家集に至つては、素より古來の作家は概ね家集を持つて居るから、其數が無數にある。類題集は、多くは近世に出來たもので、

それも尠くは無い。

是等の歌集は、歌集としてそれ〴〵特長があるが、一般の詠歌の上に必要なのは、勅撰集と家集とである。私撰集にもよいのが有るが、大體に於いて勅撰集に及ばない。類題集は、或る特殊の題に就いて、和歌を詠む時に參考にすべきである。

勅撰集家集も數が多い。その凡てを讀む必要は勿論無い。その主なものを讀めばよいのである。而して是等を讀むに就いては、始から適當な心構へを以て讀まねばならぬ。

凡そ是等の歌集を讀むに就いても、種々の讀方がある。一字一句の解釋に重きを置いたり、故事來歷の穿鑿に力を盡して讀むのは、いはゞ研究的の讀方で、詠歌の爲には勞して其功が少い。是等の歌集は多くは古典であるから、初學の人にとつては、何等の勞力なしに分るといふ譯にはゆかぬ。其多くは、註釋に寄なければ歌意を解し難いのであるが、詠歌の糧にしようといふ目的でよむには、註釋は一わたりに止めて、どこまでも歌の趣を味ふといふのを主眼とせねばならぬ。それ故に、讀んでゆくうちに、往々解釋がむつかしく分りにくい歌に遭つた時などは、それはまづあとまはしにして、分りよい歌から讀んで、幾度か繰返して、自然と分つてゆくと云ふ風にするがよい。而して讀んでゆくうちに、自分の心に深く感じたり、又何等かの印象を與へた歌には、印しをつけて置いて、それらは特に繰返して讀むといふ風に爲し、勉めて

その歌集の歌風、もしくはその作家の歌風に馴れ親しんで、その歌風を消化し、自分のものとすると云ふ心構が必要である。更に言へば、むつかしい歌を強ひて解釋するといふに勉めるよりは、分りよい歌に就いて、其歌の情味を其まゝに味ふと云ふのが必要である。約めていはゞ、頭で解するよりは、情で味ふ事を目的とせねばならぬ。

以上は、歌集を讀む上に於ける大體の注意である。これから初學者の爲に參考となるべき各種の主な歌集に就いて、夫れを讀む注意及び手引となる事を述べよう。まづ撰集から始める。

撰集のうちで、讀まなければならないのは、萬葉集古今集及び新古今集の三つである。文學史上の時代から言へば此順序であるが、詠歌の爲に讀むには、まづ中間の古今集からするのがよい。

古今集は、誰も知つて居る如く、我が國の勅撰集の初めで、醍醐天皇の延喜年間に、紀貫之等四人の撰者が當時を主とし、その以前の時代にもわたつて選んだ集である。

古今集は、第一の勅撰集であると云ふ點に於いて、和歌史の上に特別な意味を有して居ると共に、實際また其歌風の點に於いて、後代の和歌に對して模範的のものとされて居る。

これは撰者自らも、前代漢文學隆盛の機運に對して、衰退した和歌を再興し、國民的の文學を興さうとの抱負が有つて、其成し遂げた所がよくその抱負に適つたから、自ら後代の和歌にさういふ地位を占め得るに至つたのである。隨つて後代の歌人に對して、長く模範となつて居たものは、實に此古今集である。

それも決して不道理では無いのである。一派の歌人のやうに、古今集を以て第一の歌集となし、歌道の聖典と看做すのは勿論極端で、且つ詠歌の上にも弊害が多い。また今に於いて古今集の歌風を以て理想的の歌風となすことも出來ないのはもとより、古今集の歌にも隨分避けなければならぬ短所を有してゐる。併し、初學の人の最初に學ぶべき歌風としては、古今集に如くは無い。それは古今集の歌風は、辭句が平明、趣味が溫雅で、入り易く解し易く、又最もよく和歌そのものの優美な趣味を代表して居るからである。

古今集には、古來數多の註釋があるが、歌意を一わたり知るには、

古今集遠鏡　本居宣長著
古今集正義　香川景樹著

の二書によれば十分である。これによつて吾人が先に述べたやうな心得で讀めばよい。

それで、古今集を讀んで學ぶべき所は、平明優雅といふ古

今集の歌風の特長を學び、その情趣を自分のものとするのにあるので、それと同時に、古今集の歌風に存して居る、理屈的とか、露骨平凡とかいふ短所は勉めて之に染まないやうにせねばならぬ。それが古今集に學ぶのに注意すべき點である。

實例に就いて言へば、

春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつゝ（讀人不知）

久方の光のどけき春の日に爲づ心なく花のちるらむ（紀友則）

木間よりもりくる月の影みれば心づくしの秋は來にけり（讀人不知）

白雲にはね打かはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月（同上）

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふがに（在原業平）

住の江の松を秋風ふくからに聲打そふる沖づ波かな（藤河内躬恒）

すがる鳴く秋の萩原朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ（讀人不知）

ソ君がうゑし一村すゝき蟲の音の繁き野邊とも成にけるかな（三春在輔）

わたつみのかざしにさせる白妙の波もてゆへる淡路島山（讀人不知）

君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波もこえなむ（同上）

これはよい方の代表者である。之に反して、

年のうちに春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

梅の花にほふ春べいくらぶ山闇にこゆれど著るくぞありける

夏と秋と行きかふ空の通ひ路いかたへ涼しき風やふくらむ

等はわるい方の代表者である。

古今集の歌には、比較的癖が少いから、之を學んでも邪道に陷ることが少ない。之が初學者の模範としてよい點であつて、又同時によく學ぶことが困難な所である。

古今集の歌風を一通り學び得たらば、次には新古今集の歌風を學ぶのがよい。

新古今集は、古今集後八回目の勅撰集で、選ばれたのは鎌倉時代のはじめ、撰者は藤原定家等五人である。

新古今集は、古今集以來和歌が段々藝術的に發達して、技巧が巧みに細やかになり、趣味が濃厚に豐かに艶麗になつて來た、その傾向の殆ど絶頂を代表したもので有る。古今集の歌風に親しんで居るうちに、何となく、其餘りに平明で、餘りに單純なのに飽いて來て、もつと豐かな美しい、又複雜なものを求めて來るのは自然の勢である。新古今集の歌風は、さういふ要求に最も適當に應じ得る。而して一方に、以上の如き特長を有して居ると共に、他方には、その缺點として、あまり技巧の末に拘んで、文字づかひや句法に癖が有つて、煩らはしいとか、意味が曖昧で印象が明瞭で無いとか云ふ弊が有る。これは警戒しなければならぬ所である。實例に就いて言へば、

なごの海の霞の間より眺むれば入日を洗ふ沖つ波（藤原實定）

思ひあまりそなたの空を眺むれば霞をわけて春雨ぞふる（藤原俊成）

昔思ふ草のいほりの夜の雨になみだな添へそ山ほととぎす（同上）

よしの山花のふる里跡たえてむなしき枝に春風ぞ吹く（藤原良經）

雲いみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな（同上）

柴の戸をさすや日影の殘りなく春くれかゝる山の端の雲（宮内卿）

あふ坂や梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ關の杉むら（同上）

霞たつ末の松山はの〳〵と浪にはなるゝよこ雲のそら（藤原家隆）
大空は梅の匂ひに霞みつゝくもりもはてぬ春の夜の月（藤原定家）
霜まよふ空に志をれし雁がねのかへるつばさに春雨ぞふる（同上）

の如きは學ぶべき歌に屬し、

今日だにも庭をさかりとうつる花消えずはありとも雪かとも見よ
故郷も秋は夕べをかたみとて風のみおくる小野の篠はら
たづねても袖にかくべきかたぞなき深さよもぎの露のかごとを

の如きは避くべき歌に屬する。

新古今集の歌は、古今集に比して、意味や修辭が複雜であるだけわかりにくい。隨つて、古今集よりは註釋の必要がある。新古今の註釋は、古今集ほど多く無いが、其中で、

の二つが最もよい。前者は全註で無いが、名歌や難歌は洩らさず註してあるから、十分である。かつ外に折添二卷があつて、新古今の主な作家の他の撰集に出た歌を註してある。後者は前者のを補ひ正して、一層完全になつて居る。

古今集を學んで未だ十分で無い歌は、平凡ではあるが、厭味とか癖とかに陷る弊が少い。新古今に至ると、惡く學ぶと、兎角修辭上の技巧とか厭味とかを得て來がちである。これ初學の人の最も注意すべき所である。併しよく學べば、先に古今を學んで得た單純な歌風は、面目を一新して、豐かな美しい情趣を得てくる。丁度白描に彩色を施こしたやうになつて

くる事が出來る。

第三に萬葉集である。萬葉集は勅撰集では無いが、我が國の最も古い歌集として、藤原奈良朝といふ和歌史上の黃金時代を代表する一大歌集で、編者は大伴家持である。

萬葉集の歌風の特長は、修辭に思想に雄健直截で、强みがあり、又自然天眞である所にある。和歌の理想は、單に優雅とか艶麗とかいふ點にのみは存せぬ。强い感情をうたふとか、雄大な情趣を述べるとか、又僞らざる衷心の情を其まゝ歌ふとかいふのも、その主な理想である。花鳥風月の樂しみか、物あはれな情緒を歌ふには、古今風新古今風の歌風がよいが、

大洋山岳天空などの壯大な景色を歌ふには、萬葉の風格を學ぶのが必要である。併し萬葉の時代は、未だ和歌の歷史の初めであるから、句法や言ひ方が粗雜であるとか、感情が粗野であるとか、つまり非藝術的の缺點が存せざるを得なかつた。今に於いて萬葉を學ぶには、この缺點に陷らないやうにせねばならぬ。萬葉を學ぶ人は、往々その古めかしく變つてゐる語法修辭の末を傳へて、一種の古癖に陷るものが多い。これは藝術と骨董的趣味とを取違へたもので有る。此弊は最も警しめねばならぬ。

左に實例を擧げる。學ぶべき萬葉の風は、次の如きものである。

天の原ふりさけ見れば大王の御壽ハながく天たらしたり（倭大后）

久方の天ゆく月を綱にさしわが大王はきぬがさにせり（柿本人麿）

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心も靡に古へ思ほゆ（同上）

東の瀧の御門にさもらへど昨日も今日も召す事もなし（日並皇子宮舍人）

君がゆく道の長手をくりたたみ燒亡ぼさん天の火もがも（狹野茅上娘子）

男子やも空しかるべき萬代に語りつぐべき名ハたたずして（山上憶良）

御民われ生ける甲斐のあるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば（海犬養岡麿）

千萬の軍なりとも言擧せずとりて來ぬべきをのことぞおもふ（高橋蟲麿）

君なくばなぞ身よそはむ櫛笥なるつげの小櫛もとらむとも思はず（播磨娘子）

、から國にゆきたらはして歸り來む益荒武夫にみ酒たてまつる（多治比鷹主）

次に避くべきものは、

山すげの亂れこひのみせしめつ、あはぬ妹かも年は經につ、（第十一）

玄はぶかひはなをぞひつる劒太刀身にそふ妹がおもひけらしも（第十一）

わが待ちし秋は來たりぬ玄かれども萩が花ぞも未だ咲かずける（第十）

などの風である。

萬葉集は、廿卷四千五百首の浩瀚な集である。而して、その詞も、我々には耳遠い古語であるから、初學には註釋が必要である。萬葉の註釋には、

萬葉集古義　鹿持雅澄著

が一番詳しい。併しこれは專門家の見るべき書である。歌の意を一わたり心得るには、

萬葉集略解　橘千蔭著

で十分である。併し古風の言語文法を有してゐる萬葉集の歌も、全體が難解であるといふのでは無く、中には分り易い

歌が有る。否、眞情流露して萬葉の眞髓を發揮した歌の多くは、此分り易い歌に屬するので有るから、此處にも例の註釋に拘泥する弊を捨て、反覆讀み味つて自然と分るといふ事を大本の目的とすべきである。

萬葉集から選んだものには、

萬葉新採百首解　賀茂眞淵著
萬葉佳調同拾遺　長瀨眞幸輯

などがある。是等は一わたり萬葉の歌を知るには便利である。が併し、撰者一個人の趣味に偏して選ばれた氣味を脱しないから、上記の如く浩瀚ではあるが、やはり原本に就いて讀む方がよい。

それから賀茂眞淵に、

萬葉考

といふ著がある。是は註釋としては粗いが、その序に記された文章は、萬葉の評論ともいふべきもので、萬葉の精神を了得した歌人の言として、味ふべきものがある。此文は是非讀み味はねばならぬ。多くの註釋よりも、その數篇の文字を熟讀する方が、萬葉の眞趣を了解する上に功果が多い。

古今、新古今、萬葉の三歌集は、我が國の撰集の最も主なもので、その三つの歌風は、とり〳〵に上に述べた如き特質を有して、和歌の三代表的歌風をなして居る。此三つの歌風

をよく味はつて自分のものにしてくれば、詠歌の基礎は大體學び得たものと言へる。

第三章　歌集を讀むこと　二

古今新古今萬葉の撰集を讀んで、一通りそれらの歌風に通じたらば、次には主な家集を讀んで見るがよい。家集を讀むにも、特にある作家の歌風に私淑して、その家集を熱心に讀むといふのもよい。ここにはまづ古來のすぐれた數人の家集に就いて話して見よう。

元來家集は、作家各自の個人的特色が現はれて居る所に、面白味があり、價値がある。撰集、殊に勅撰集の歌は、撰者が一定の標準で選んだ丈けに、往々その撰集風といふ型に入つた歌が多く、正雅な風格は求められるが、自由の情趣は往

往にして之を缺いて居る憾がある。家集とても、素より作者自身、もしくは編者の多少の撰擇を經たものであるが、併し撰集、殊に勅撰集に比すれば、作者の特色が自由に現はれて居る。近世のすぐれた歌人井上文雄は、撰集は禮裝の人の如し、家集は平服の人の如しといつて、後者の自由自然なのを喜んだが、いかにもその通りである。

和歌の歴史の上ですぐれた家集の出たのは、新古今集時代と、德川時代とである。

新古今集時代には、多くの勝れた作家が出たが、その中でもすぐれた家集を遺した人は、俊成、西行、定家、家隆、慈圓、後京極攝政の六人である。此六人の集の事を、後世六家集といふ。中でも吾人が詠歌の爲に推奬したいのを、西行の山家集とする。

西行は我が國の歌人の第一位の中に數へらるべき天才である。山家集は精撰したものではなくて、玉石混淆ではあるが、大體に於いて特色のある作品に滿ちて居る。

西行の歌には、情感がいかにも自然眞率で、しかも清く美しく、かつ自然の美を眞に樂しみ、人事のあはれを深く味つて居るといふ趣がある。吾々が山家集から第一に學ばねばならぬのは、三昧に入つたともいふべき、その詠歌の精神である。山家集のすぐれた歌を、例によつて十首だけ擧げよう。

佛には櫻の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば

寂しさに堪へたる人の又もあれな庵ならべむ冬の山里

吉野山やがていでしと思ふ身を花散りなばと人やまつらむ

花にそむ心のいかで殘りけむ捨はててきと思ふ我が身に

わきて見む老木は花もあはれなり今いくたびか春にあふべき

眺むとて花にもいたく馴れぬれば散るわかれこそ悲しかりけれ

こをまた我すみうくてうかれなば松は一人にならむとすらむ

覺束な秋はいかなる故のあればすずろに物の悲しかるらむ

雲雀たつあら野におふる姫百合の何につくともなきこころかな

舟岡のすそ野のつかの數そひて昔の人に君をなしつる

山家集は六家集本は、日本歌學全書第八編に載せてあるが、同集には數種の異本がある。中に、故藤岡博士の、

異本山家集

は最も良い本である。同書は、卷末に、正鵠を得た西行論も載つてゐるから、此書で讀むのが最もよい。もし又註釋を要する人には、

增補山家集抄　固淨法師著

がある。これは四季の歌だけ刊本になつて居たが、尠い本であつたのを、近い頃山家集詳解と名づけて刊行せられた。

山家集と併せ讀むべきは、定家の

拾遺愚草

である。六家集本は、歌數も多く、讀みにくい。初學の人は、自分が選出した

定家歌集

に就いて讀むのが便利であると信ずる。

徳川時代には、勝れた歌人が多く出たが、其中でも特色の有るのは、賀茂眞淵、香川景樹、井手曙覽、加納諸平、大隈言道等である。

賀茂眞淵には、賀茂翁家集がある。續歌學全書第一編に載せてある。眞淵は萬葉を學び、萬葉風を詠んだ人であるが、さすがに後代に出た丈けに、萬葉風の中に他の歌風の特長をも加味して、一種獨特の歌風をなして居る。家集中、勝れたものを擧げると、

年月のくれぬと何か惜みけむ春にしなれば春ぞたのしき

うら〳〵と長閑けき春の心より句ひいでたる山櫻ばな

櫻花はな見がてらに弓射れば鞆のひびきに花ぞ散りける

み吉野を我が見に來れば落ちたぎつ瀧の都に花散りみだる

信濃路のおきそその山の山櫻又も來て見むものならなくに

大とものみつの浦浪吹き寄せて松原こゆる秋のゆふかぜ

秋の夜のほがら〳〵と天の原照る月かげに雁鳴わたる

信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな

播磨潟迫門の入日の末はれて空よりかへる沖の小舟

もろこしの人に見せばやみよし野の吉野の山の山さくら花

萬葉風に新古今風を加味した雄麗な作風に於いて、近代歌人中最もすぐれたのは、加納諸平である。諸平は、眞淵の流を汲んだ本居大平の門人である。諸平の家集は柿園詠草と稱し、續歌學全書第七編に收めてある。其すぐれた作を擧げれば、

近江の海港八十あり何しかも思ひとまらで雁の行ぐらむ
月にうつ大城の鼓ばし待てくだち行く夜を誰か惜しまぬ
岩くえて磯わの城門は荒れにしを夜聲寒くもよする波かな
姫島の松の夕日に雁鳴きて我子こひしき秋風ぞ吹く
みづち住む淵を千尋の底に見て太刀の緒かため行く山路かな
うちおける板目にされし黒髪をゆゆしと見つつ背子や歎かむ
ゐしたづのつばさの上に玉ぎて神やますらむ瀧の水上
わかくさのみつの御牧の放ち駒たがとる鞭に千里ゆくらむ
あら熊は行方も知らず杉山のうつぼにこもる木枯の聲
天草や天より遠の韓山も雲になびきて日は暮れにけり

同じく萬葉から脱出して別種の特色をなしたのは、井手曙覽である。彼の歌は、脱俗飄逸ともいふべき趣があつて、古來の歌人の中で鮮かな特殊の一歌風をなして居る。彼の家集は、志濃夫廼舍歌集といつて、橘曙覽全集の中に收めてある。其作風の一端は、

眉白き翁いで來て千年ふる門の山松なでてほむるかな
羽ならす蜂あたたかに見なさるる窓を埋めてさく薔薇かな

、賤が家はひりせばめて物植うる畑のめぐりのほほづきのいろ

○蝶うつとせし手はづれて御園生の花打こぼし立つ少女かな

、蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに走る西へひがしへ

○莖折れて水にうつぶす枯蓮の葉うらたゝきて秋の雨ふる

影たるゝ星にせまりてうすぐろき色たたなはるおぼろ夜の山

破れたる硯いだきて窓かこむ竹みるこころ誰に語らむ

夕けぶり今日は今日のみたてておけ明日の薪は明日とりて來む

鶏の音によびおこされてうつ石もとる手わなゝく曉の霜（寒婢）

等に伺はれる。萬葉を學んでも、單に模倣に陷ることなく、諸平の如く、曙覽の如く、何らか特殊の風に脱化してくることを心がけねばならぬ。

以上の三人は、いはゞ萬葉派、もしくは萬葉から入つて一家の風を成した歌人であるが、之に對して、古今風から出て一家の風を成したのは、香川景樹である。景樹は、自ら古今風を主義とし理想として說いた人であるが、その歌風は、よく古今風の精神をとらへて、かつ其中に一味清新の歌風を、創り出て居る。卽ち彼の歌風は、古今集の自然にして優雅なる間に新しい情味をたゝへた所に特色を有して居る。今彼の作風を代表してゐる作の一例を擧げれば、

千早ふる神の宮瀧おと澄みて吉野の奥も春や知るらむ

、二度は越えじと思ふみちのくの岩手の關にうぐひすの鳴く

、片岡の梅のさかりになりしよりわしたの原は匂なりけり

妹と出でて若菜つみにし岡崎の垣根こひしき春雨ぞ降る
大井川かへらぬ水にかげ見えて今年も咲けるやまざくらかな
筏おろす清瀧川のたぎつ瀬に散りて流るる山吹のはな
埋火の外に心はなけれども向へば見ゆる志らとりの山
蝶よ〳〵花といふ花の咲くかぎり汝がいたらざるところなき哉
富士の嶺を木間〳〵にかへり見て松のかげ蹈むうき島が原
若草を駒にふませて垣間見し少女も今は老いや志ぬらむ

彼の家集は、桂園一枝及び、桂園一枝拾遺を主なものとする。續歌學全書第四編に收めてある。なほ彼の歌に就いては、論難反駁の書が出た。卽ち秋山光彪が桂園一枝を評したのに對して、景樹の門下中川自休が、大ぬさを著し、續いて大ぬさ辨、ぬさのよる瀨などが出た。是等も一讀の價値はある。

景樹と共に、彼の先輩で、彼の歌風の淵源をなした小澤蘆菴、また景樹門の俊秀たる木下幸文等の家集も、それ〳〵特色があつて、推奬に價する。

蘆菴には六帖詠草がある。續歌學全書第六編に收めた。幸文には、亮々遺稿がある。同第七編に收めてある。

次に大隈言道に至つては、上記の人々と比較して、更に多く個人的特色を發揮した歌人で、彼の歌風は、從來の古典的趣味の、型を脱して、その趣味に着想に觀察に、一種の輕妙な奇拔な點があつて、あかも野卑に陷らない所に特色がある。從來の他の作家の歌風に親しんで來て、言道の歌に至ると、

未だおぼえなかつた一種の鮮新の味を感じるので、和歌の天地が幾分ひろめられたやうな氣がする。吾人は、上記の人々の歌風を味ふと共に、言道の歌風をも是非味つて見ねばならぬ。言道の集は、續歌學全書第八編なる草徑集がこれである。

例によつて作風の一端を示すと、

梅の花思ふばかりの枝の樹を心にうゑて見る寢覺かな

放つ矢の行方たづぬる草村に見出でて折れる撫子のはな

行く人を田舍童の見るばかり立並びたるつく〳〵しかな

妹が背に眠る童のうつつなき手にさへめぐる風ぐるまかな

今はとて打寢る時は命さへ我が身と共に伸ぶかとぞおもふ

聞えずはなほ聲高に道とはむ此方に行くや志賀の山越

親泣けば子さへ泣くなり世の中のせむすべなさも何も知らずて

田の面より我門さして來る人の近づかぬ間に誰と知らばや

聞すてて飯たく親の見ぬ間にも聲のかぎりに泣くうなゐかな

今日も又我家に我身かへり來ぬ限の門出未だこずして

彼に就いては、吾人は特に歌學論叢の中に「大隈言道」と題して、やゝ詳しい評論を試みたから、參照せられたい。

家集も種々あるが、初學者が先讀むべきは、以上の數種の如きである。更に進んで、其他の歌人の集に就いて研究するのは、頗る興味があり、かつ有益である。其中には、自分と趣味が合つて、自ら私淑せられるやうな歌風に遭遇し得るものである。

古來の有名な作家の和歌を、各人約十首以内に限つて、我が父の選び出た集に、

和歌世々のあと

がある、小册子であるが、初學者が各歌人の歌風の一端を知る爲には、手引にならうと思ふ。また自分が、近世の家集のうちから拔抄して、簡單な評釋を試みた舊著に、

國歌評釋

がある。これも多少の參考にならう。また歌學論叢の中にも、近世歌人雜話の一編を載せて、國歌評釋に洩らした數人の歌人に就いても記して置いた。

第四章　觀察及び感味

吾人は前章に、詠歌の爲に模範として讀むべき古來の撰集家集に就いて述べた。併し、これらの歌集を讀むばかりでは、勿論十分でない。古歌を學ぶのを以て詠歌の能事畢れりとするのは、決して吾人の言はむとする所では無い。歌の本來から言へば、必ずしも古人に學び、他人によることは無いので、只其詠歌の本義に至るが爲には、以上述べた如き古人の集によつて教養されるのを要するので有る。隨つて之等の歌集を讀むと共に、歌を詠まうとする人は、一方に絶ず自分で深く樣々に工夫する所があらねばならぬ。否、これがあつて初め

て他人の歌集を讀んで功能が有るのである。

自ら工夫するといふのは自分で歌心を養ひ、歌を詠み得る準備を絶ず作つてゆく事で有る。それには、常に注意して日常經驗する所の萬般の事柄を歌心を以て觀察し感味する事が必要である。他人の作を讀むにしても、自分の經驗にあてはめて見て、眞に了解される事が多いのである。

詩人は、日常平凡の些細な事物の間にも、美妙な詩美を見出すといはれて居る。實際歌心を以て見れば、何物も歌で無いものはない。

多くの人は美しいものを美しいと感じる心は有ながら、注意が足りない爲に、始終看過し聞過して居る。旅行して、山や川や海の美しい眺めや、大きな景色を見たりすれば、誰でも漠然と、崇高いとか、美しいとか、壯んだとかは感じる。併し只漠然とさう感じるばかりに過ぎないが、注意して觀察する時は、其中に、或は富士の白雪に夕日の照つてゐる美しさとか、賀茂川の堤を霧がこめて、其所を小原女が見え隱れして行くさまとか、或は荒海のそばだつた巖に高い波が碎け散る美しさとか、又はその波の音の高く低く聞える調子とかに氣がつく。斯ういふある特別な所に氣がついて來るやうになつて、初めて歌が出來るのである。それで、斯ういふ點に氣が付くやうになる爲には、絶ず注意して、觀察する事が必

要である。その觀察が益々進んで來ると、單に斯ういふ自然の大きな美に對してのみで無く、わざ〳〵名勝の地に行つて見るのみで無く、始終見馴れ聞馴れて居る自分の周圍に、いくらも美しさを發見し得るに至る。自分の家の庭の草花に蝶が舞つて居るのも歌になるし、花賣が朝の往來を歩いて行くのも歌になる。否、單に實際に觸れることの中にばかりでは無く、それを所緣として、心の中に樣々の美しい事物を作り出す事が出來るやうになる。

觀察するといふのは、主に自分の心の外の物に就いて言つたのであるが、それと共に、我々は我々人間の心や、その活きに就いても、色々な美しさを發見し得る。

誰でも人は生きて居ると共に、樣々の感情を持つて居る。樂しいと思つたり、悲しいと思つたり、なつかしいと思つたり、寂しいと思つたり、絕ず動いて居るのが我々人間の心である。人に別れて悲しむとか、過ぎ去つた昔を忍ぶとか、將來を心に畫いて樂しむとか、樂器の絃が風に觸れて鳴るやうに、絕えず動いてやまないのが人間の感情である。（前に叙べた外界の景色の美しさに動くのも、つまり此感情の活きに外ならぬのである。）斯かる感情から歌が出來る。併し、之も單に實際の場合に、自分の感じたところが歌になると云ふに限らぬ。人には同情同感といふものがある。他人の感情に觸れ

る毎に、自分の感情をも動かして、互に感じあふものである。此同情同感が素と成つて、また歌が出來る。卽ち單に自分の實際に經驗した場合のみでなく、能く他人の樣々の感情に同情して、それを歌に詠むといふやうになる。

否、更に歌心が發達して來ると、實際の事實を緣にして、樣々に想像の上で創り出した感情のうちに入つて、我と我が歌の世界を創り出すに至る。ここに至つて歌心の極致に達するのである。歌よむ人は、此境に至らむことを心がけねばならぬ。

要するに普通一般の人は自分の實際經驗する場合にも、唯悲しいとか、唯樂しいとか、漠然と感じて仕舞ふ丈けであるが、歌を詠む人は、その悲しさや樂しさを、もつと細かに鮮かに感じる。而して更に進んでは、自分の實際經驗した時のみでなく、能く他人の感情の中にも入り、又想像に訴へて樣樣の感情を味ひ得るに至るのである。前に述べた觀察が抒景の歌の母であるならば、斯ういふ感味といふ所から、抒情の歌は生れるのである。

併し、觀察感味といひ、抒景抒情といふけれど、素よりはつきりと區別され得るものでは無い。殊に短歌に於いては、抒情抒景は大抵は一緒に成つてゐて、純然たる抒景の歌、純粹の抒情の歌よりも、情景一つになつたところに面白味があ

るのが多い。隨つて歌心を養ふに就いても、自然人事の觀察と、人心の感味と、固より別々に出來るものでは無いが、說明の爲に斯く分けたのである。

外界に、心の中に我々が日常經驗してゆく事を、出來るだけ注意して觀察し、感味する事が、歌心を養ふことであるので、其爲に模範となるのは、吾人が前に述べた如き他人の作物である。さういふ人々の作を讀むに、斯くの如き心構を以てし、常に內省工夫に照らして、古來の名歌を味ひ、古來の名歌に照して、內省工夫を積んで行く時は、自然歌心が養はれて行く。

併し、單に內省工夫と言つても、初學者にとつては見當がつかぬ。未だ物足りない憾が有る。それはどういふ風に內省工夫したらよいかと云ふ事が分らないからで、つまるところ歌の理想はどんなものであるかと云ふ事が判然と心に理解されないからで有る。それには、少くとも、歌とはどんなものかと言ふ事に就いて、大體の考を、あかも具體的に得ておくの必要が有る。

其爲には、まづ古來のすぐれた作者の歌論を讀んで見るのがよい。歌論は、理論的には不完全なものが多いが、併し實際各作家の經驗し感得したものだけに、此處に述べたやうな

目的には却つて適當しい。

歌論の書も、昔から澤山あるが、初學者の爲に吾人が推薦しようと思ふのは、

石上私淑言　本居宣長著
振わけ髪　小澤蘆庵著
塵ひぢ　同
歌學提要　香川景樹述
隨所師說　同

などで有る。

石上私淑言は續歌學全書第三編に收めてある。歌とはどんなものであるかと云ふ理を、一わたり說いてあるから、是非讀むがよい。併しもと宣長は、中古の優美な歌文を標準として說いた丈けに、歌とは單に優美な感情を述べるもので有るといふ風に思はせる嫌は有るが、此點は特に注意してさう狹く考へないやうにするを要する。

振分髪及び塵ひぢは、續歌學全書第六編に、歌學提要隨所師說は同第四編第五編に載せてある。

蘆菴と景樹とは、殆ど同じ思想を述べたので、歌は感情の自然の發表であること、歌に調を重んずべき事を主眼として說いてゐる。殊に景樹の歌論は、初學者の入門には適切な事が多い。併し二人とも自然を重んずる餘り、まま歌の藝術としての方面を無視するやうの傾が有るから、ここは注意すべ

きて、前の私淑言の説で補つて考へるのを要する。但し順序から言へば、初學者はまづ景樹の著書を讀んで、歌の決してむつかしいもので無い事、その感情の自然自由の發表で有る事を知り、それから蘆庵を讀み、後に宣長を讀んで、歌の理想を會得するのが必要である。

これらの歌論で大體の歌に對する考をこしらへ、古來の歌集に就いて名家の作を味ひ、自分の工夫内省を忘れないで勉めて行く間には、自然和歌の門に入り、和歌を詠む爲の準備は十分出來るのである。

歌心を養ふ爲には、また旅行と讀書とが必要である。昔からすぐれた歌人は、よく旅行をした。旅中の新しい鋭敏になつた感情で受け入れた種々の印象は、和歌の爲に最良の要素である。長途の旅行のみでなく、折々の散歩などの折にも、能く注意すれば、歌心を養ふ上に功果が多いものである。人の境遇によつて、容易に旅行するやうな機會を得がたい人もあるが、さう云ふ人は、旅行記などを讀むのがよい。

次に、讀書の功果が多く必要である事は言ふ迄もないが、勿論多少の選擇を要する。

平安朝時代には、白氏文集が好み讀まれたので、それを自分の和歌の養にした歌人も少くない。俊成などは、歌を考へ

る時には、白氏文集を飜いて詩境に入つたと傳へられる。又源氏物語も、歌人の爲に特に愛讀された。順德院の八雲御抄などには、歌人の必ず讀むべき書として源氏を擧げて有る。これは其後の歌人の間にも實行された所で、近世本居宣長は、上に述べた石上私淑言の中に、源氏は和歌の精神を最もよく說いたものであるから、和歌を詠むものは必ず源氏を熟讀して、源氏の精神を我がものとせねばならぬと言つた。

源氏も素よりよい。併し必ずしも源氏に限らず、苟くも古今の文藝上の名著は、折があつたら讀み味ふと云ふ事を忘れてはならぬ。

而して、斯く吾人が作歌の修養の爲に、種々歌集其他の讀書等を說いて來た所で、最後に、已に注意した所ではあるが、特に明らかにして置かねばならぬ事がある。

それは、歌はどこまでも自分のものでなければならぬ、模倣は駄目であると云ふことで有る。

模造品はいくら美しく出來ても、決して眞の藝術品では無い。他人の作、もしくは作意を模倣した歌は、決して眞の歌では無い。歌は、ある個人の胸から個人的に、卽ち獨創的に創り出されて初めて價値がある。

他人の作を讀むのは、つまり此處に至る徑路である。初めて和歌の道に入立たうとする人は、まづ他人の作を模して歌

に入る必要はある。併しそれは、自分の歌を創り出す縁を其處に求めるといふのである事を吳々も忘れてはならぬ。吾人の入門を讀んで和歌を詠まうとする人も、吾人の入門の精神の此處にあることは十分了解して貰はねばならぬ。吾人が本章に說いた觀察とか內省とかの意味も、結局これに外ならぬのである。

第二編　作歌法

序

第一編に說いたのは、全體くるめて作歌の準備と言へる。古今の名匠作家の歌集歌論を讀み、工夫自發して行く間には自ら歌心が養成され、それで歌を讀む基礎は出來たといふものである。此基礎が十分出來れば、自然歌は詠める。心の中にそれだけの下ごしらへが出來ると共に、其時に觸れて、殆ど自然と歌が出來てくる。併し單に自然に任せるだけでは十分で無い。また單にこれだけ說いた丈けでは、吾人の任務は盡されぬ。歌はまた一つの技術で有る。繪を學ぶのに繪心が

有るのみでは、固より不十分で、繪の具の配合の工合とか、運筆の方法とか、寫生の仕方とかを學ばなければならぬやうに、音樂を學ぶのに、單に音樂を解する能力を養ふだけでなく、それ〴〵專門特殊の技術を學ばなければならぬ如く、歌を作るにも、又幾分特殊の技術を學ばなければならぬ。卽ち吾人はその手引として、以下簡單に初學者の爲に作歌法を述べて見よう。併し吳々も言つて置く。以下吾人の述べる作歌法は、作歌の技術を敎へるのである。單に之を知つた丈では、決して眞に作歌の旨を得たものとは云はれぬ。よしそれで歌を綴る事が出來るやうになつても、そは單に文字を綴るだけで、眞に歌を作り得るやうになつたとはせられぬ。作歌法の根柢として、吾人が第一編に述べたやうな、根本の基礎をつくらねば、到底歌を詠み得るに至つたとは言へない。隨つて以下說く所の作歌法は、決して第一編と離れては十分で無い。吾人は此入門を讀んで、和歌を作らうとする人が、必ず第一編に吾人の述べた所を熟讀し實行しながら、以下の作歌法によつて、詠歌を學ばれむ事を希望する。

第一章　構想と題詠

歌に最も大切なものは想である。想とは歌の實質で、又目的で、また出來てくる原因で有る。歌があれば必ず想がある。想が無くては歌は無い。歌を詠む人の心には、必ず何か詠み出さうとする考がある。之が現れて歌となるので有る。別に何等の思慮工夫を用ゐないで、自然に想がまとまつて歌が出來るといふ場合も有る。併し其時でさへ仔細に考へて見れば、必ず幾分の工夫が用ゐられて居るか、さうで無ければ、長い間の熟練の結果で、自ら出來るので有る。隨つて作歌法の第一義は、此想のまとめかた、若くは選びかたに有るのである。

まづ初學の人が歌を詠まうとする。特に感じた事も無く、只歌を詠んで見ようとする。卽ち純然たる學習の場合である。それには何か絲口が無ければならぬ。まづ斯ういふ事を詠んで見ようと思ふ事が無くてはならぬ。其時に必要なのが所謂題である。歌には題と云ふものがあつて、平安朝の初め、卽ち古今集の少し前頃から行はれて來た。題によつて詠むのが所謂題詠であつて、題が種々定められて來たと共に、歌は全然題詠のみの事と成つた。之は感じたままを自然に歌にすると云ふ歌の本來の性質から言へば、稍邪道で有つて、其爲に、題詠の弊に就ては、德川時代の歌人の間にも盛んに論ぜられたのであるが、併し學習の上から考へ、また歌の藝術といふ

性質から言ふと、題詠は全く非難すべきもので無く、必要なものである。

而して、その歌の題には、古來から樣々ある。元來歌とは人の感情によつて起るので、人は天地人の萬事萬物に就いて、其感情を動かすもので有るから、何でも歌の題にならないものは無いので有るが、古來多くの歌人が、多く詩情を動した目的物は、自ら其間に極つて居たので、隨つて特に歌題といふものが生じて來たので有る。古來の歌題は、長い間の歌人の經驗の間に、自ら取捨選擇されて成立つて來たもので有る。此意味で言へば、古來の歌題は決して無視する事が出來ない。殊に初學者はまづそれから入るのが適當で有る。

古來の歌題は多くの種類があるが、大體、四季戀雜等に分れて居る。四季は春夏秋冬の景物で、花とか月とか雪とかの、自然の事物が之に含まれて居る。雜は天象地儀の現象とか、旅中の歌とか、何か特別の場合の歌等を雜然と含めたもので有る。今日の言葉にあてはめて見たらば、四季は大體抒景で戀は抒情、雜は兩方に分屬する。併し歌には元來抒景抒情の區別は、さう嚴密には出來ないので有る。

初學者が入門の爲には、まづ四季の題から詠むのがよい。四季の風物に關した歌は、平素誰しも見聞する事で詠み易い。次には雜の題を詠むがよい。

これ等の題に就いて、歌を詠む上に注意すべき事が二三あ

る。第一に古來の遺物として殘つて居る題は、特に詩趣のある二三の題目、（例へば七夕鷹狩の如き）を除いては、斥けて了ふ事が必要で有る。例へば、子日、照射、駒迎、佛名、などの如き昔の風俗習慣。呼子鳥とか、藤袴とかいふ如き、其物が明らかでない動植物等は、我々にとつては、何等の感興をひかない題目である。それを其風俗の無くなり、若しくは不明になつた後も、歌人が唯昔の風を傳へ、跡を襲うて詠んで來たので、全く無意義で有る。かういふ題で歌を詠んでは、いくら能く出來ても、古人の口眞似をするのみで、眞の歌は出來ぬ。其他かういふ題は澤山ある。吾々に何等の感興をも與へない題は、たとへ練習の爲にも捨てるのがよい。

第二に、狹い制限したやうな題は捨てて、廣い題をとるがよい。例へば、同じ花の題にしても、昔の人はよく、對花厭風とか、落花似雪とかいふ題を好んで詠んだ。併し斯かる題は、題の方で已に歌に詠むべき事を命令して了つて居る。斯かる題で歌を詠むと、歌が題の說明になつて了ふ。歌は說明では無い。斯ういふ題は避けたがよい。元來題は、我々が構想の緣を與へるものと見做すべきで、初めから題で我々の想像を束縛して了ふやうな事は避くべきで有る。

第三に、新題である。新題とは、古來の歌の題の中に無かつた題で、近頃になつて出來た新しい事物を詠むことで有る。汽車とか、電話とか、自轉車とか云ふのが、これである。斯う

いふ題で詠めば、それが卽ち新しい歌であるといふやうな、誤つた考をいだく人が往々ある。勿論新しいものを題とするのはよい。（昔の人が漢語であるからと言つて詠まなかつた海棠、水仙、山茶花の類、近頃もてはやさるゝ睡蓮、コスモス等の如きは、好い歌の題である。）併しまづ我々は、歌になるものと、歌にならぬものとあるのを考へなければならぬ。多くの所謂新題の歌に、少しも詩趣のない説明的な歌の多いのはここを考へなかつたからで有る。次に斯かる新題を殊更に作つて、歌をよむ必要は少しも無い。歌は言葉の遊戯で無い。題は、自然に出來てくるのは決して咎むべきでないが、特に吾々の詩趣の目的物とならないやうな事物を題とするには及ばぬ。否、そればかりでなく、其爲に歌を遊戯化して眞の歌の精神を害する弊がある。歌題の本質は、一般に詩趣の目的物たり得るといふ處にある事を忘れてはならぬ。

要するに、進んだ人が、種々の變つた題に就いて、殊更に想像をめぐらし、歌才を練るといふ場合は別として、初學の人は、まづ花とか、月とかいふ、普通の題に就いて、あくまで自由に詠むのがよい。

而して以上の注意を以て、題によつて歌を詠むとする。まづ花といふ題に就いて詠むとする。すぐ自分が詠み出さうとする想が出てくればよし、さうで無い時には、まづ自分が花

に就いて經驗した種々のことを、心に思ひ浮べて見るのが必要である。併しそれだけでは中々絲口が開けない。さういふ時には、他人の作つたものを讀んで見るがよい。併し他人の作を參考にするに就いても、其まま他人の口眞似をするといふ事は、初めの間から出來るだけ避けてかからねばならぬ。他人の作を十首なり廿首なり讀み味つて、自分の心の中の感想にてらし合せて、色々と工夫するうちに、自然一つ斯ういふ所を詠まうと、思ひ浮んでくるやうにせねばならぬ。

花は美しいと云ふ事は、誰でも又いつでも感じて居る。併しこれだけではいくら考へて居ても歌は出來ぬ。その美しい所を現はさなければならぬ。如何現はさうか、花の美しさにも種々ある。月に照らされて居る姿も美しい。遠くから見た眺も勝れて居る。そこを歩いて見たとするなら如何であらう。物靜かな夜に、風でも少し吹いて、はら〳〵と袖に散りかかつたら如何か。自分一人かと思つたら、向ふの木影に人も居る。鐘の聲も聞える。見上げると月も雲間に隱れた。更にこれが懷古の思の深い吉野山であつたとする。南朝の故事も思ひ出される。……といふ風に、種々の景色が心の中に思ひ浮べられて來る。ここで歌の想が形を具へて來たのである。而してそれと伴つては、其他の樣々の事柄も考へられるに相違ない。ある時上野で花を見た夜、犬に吠えられて困つた事とか、或は同じ花見の人の見苦しく騷いで居た事とか、或は植

木の直段を話して居た人の事とか、種々なことが思はれるに違ひない。

そこで之を歌にするとなる。固より三十一文字の短い形に詠みこむので有るから、其考を悉く詠む事は出來ぬ。ここでまづ斯くの如く形を具へて來た想を取捨する必要が出來る。第一に花の美しいといふ感じを詠むので有るから、困つた事とか、商賣上の話とかは、初めから捨なければならぬ。これが第一の取捨で有る。次に同じく花に就て思ひ浮べた樣々の想の中でも、一つ中心になる點をとらへねばならぬ。或は花の散つた所を中心とするとか、或は月の光に花が白く見えた所を中心とするとかして、之に樣々の配合を用ゐて、此處でいよ〳〵歌の想が成り立つたので有る。

これは花といふ題に就いて、歌の想を作つてくる一つの例で有る。其他、月でも、雪でも、秋風でも、萩でも、何でも、凡て同樣であるから、一々述べる事を略する。歌の想を選びまとめる事に就いて、大體は以上の如くであるが、次になほ二三の注意を述べて置く。

第一に類想を避ける事が必要で有る。模倣の不可な事は已に述べた如くで有るが、類想も同樣に初めから避けるやうにしたい。元來歌は二千年來詠み來つたので、其間に自ら類想といふものが出來て居て、花の歌なら白雲とまがへるとか、

梅ならば暗夜に香をとめて探るとか、歳暮ならば何にもしない間に年の暮れたのが惜いとか、屹度慣例のやうに言つて居る。初學者が歌を詠むに就いても、斯ういふ弊に落ちることは、初めから警戒せねばならぬ。類想ばかりを詠んで居ると終にその中を出る事が出來なくなつて、所謂陳腐な月並の歌ばかりを作るやうになる。何も初めが大切である。少し困難でも、初めからその考て、古來の類想に陷らないやうに、何でも自分が眞に感じた事を歌ふやうにせねばならぬ。

第二に、さうかと言つて、新奇を貴ぶあまり、狂體に陷らぬやうにせねばならぬ。狂歌には狂歌の面白味は有るが、それは歌とは別種のものである。初學の人が狂歌じみた事を言つて新しぶつて居るのも往々見うける所で有るが、之は斥くべきで有る。

第三に想を作り出す前には、出來るだけ想を練るのが必要で有る。歌は自然になりいづるをよしとすと言つたとて、決して工夫を斥くべきで無い。昔の人の歌論に、心を十方に走らゝして、山野河海に風情を求むべしとやうにあるのは之を言つたので、歌を詠む前には、十分に詩興を促し起して、想を豊にするのが必要で有る。

第四に、さういふ風になつて來る爲には、段々進んで來たらば、同じ題で、同時に五首、もしくは十首、廿首といふ風に多くの歌を詠み試み、同じ花とか月とかいふ題に就いても

さまざまの趣向を考へて詠んで見るのがよい。初めは大體一題二首詠むのを稽古の習として居るが、習ふに從つて多く詠むべきで有る。

第五に、題は前に述べたやうな普通な題を、成べく多く詠むのがよい。それらの題の主なるものを、四季の折々にふれて詠み、其間に雜の題を交へて詠んで行くのがよいと思ふ。（それらの題、並にその題に當る古人の秀歌の例は、合せて之を附錄に載せる事とした。）

なほ題詠の參考とすべき古來の歌を見ようとするには、一一各歌集に就いて調べる勞をとる迄もなく、類題集といふ重寶なものが有るから、其主なものを擧げよう。

萬葉集を題で分けたものには、
　萬葉集類葉鈔　村上圓方輯

萬葉はじめ、中世の諸家の歌を、類題的に輯めたものには、
　怜野集　清原雄風輯
　草野集　木村定良輯
　鰒玉集　加納諸平輯
　鴨川集　長澤伴雄輯

近世の諸家のを輯めたものには、
　獨看集　松平樂翁編

また家集では、六家集を類題にした、

山家集だけのには、

がある。

是等の書のうち、初學の參考に推すべきは、怜野集、山家集類題の二種であらう。

以上は、特に初學の入門の上に於ける用意として述べた所であるが、なほ一言して置きたい事がある。

題詠は手段である。決して詠歌の必要條件では無い。勿論、深く詠歌の道に入り立つた後とても、題によつて歌を詠むといふ事は多くあることであるが、併し段々上達するに從つて、題によつて想をまとめてくるといふ順序を、一々踏むに及ばず、自然人間の事物に接して、樣々の感興を起すや、やがて歌となつて詠み出づるといふ境地に立ちいたるべきで、之が寧ろ詠歌の本來の意義に協つたもので有る。

題詠はここに至るまでの階梯で有る。而して其爲には初めから其覺悟を以て詠む事が必要で有る。さうしないと、題が無ければ歌が詠めないといふ弊にまとはれる事になる。それと共に、題詠で學ぶに就いても、適當な題であれば、成べく範圍を廣くとつて、一切の事物を詠んで見るといふ風にしなければならぬ。

而して題の廣きを要するのは、又構想の廣きを要するのである。優美の趣をのみ詠むのが、決して歌の唯一の理想では

無い。勿論、優美もよい。櫻の花に夕月の匂つて居るやうな趣もよい。世の濁りにあまぬ清い心に戀に泣いて居るやうな趣もよい。併しそれと共に、海洋に激浪の逆まく壯觀、志士が死を決して天下につくす烈しい心事、或は至尊を敬ひ、神明に畏れる敬虔の至情、或は宇宙人生の至妙に思ひ潛んだ深奥な情、或は又世相の矛盾のうちに存する輕妙な滑稽など、いづれも歌の理想である。想は狹くてはいけぬ。あくまでも自由に、あくまでも廣く、詩趣を萬事萬物の間に見出し、かつ創り出すといふのは、歌よむ人の理想で有る。

而して最後に特に注意して置きたいのは、本章の始に言つた如く、此想といふものが、歌の實質として、目的として、歌に最も必要なもの、否、歌の生命である事を、十分心に銘して置くといふ事で有る。歌には勿論表現が大切であるが、どちらが大切かと云へば、想が大切である。平凡陳腐な想を奇麗な語句で言ひ表したより、語句は少しは整はずとも、想が清新であり、詩趣に富んでをらむ事を採る。

語句の末に於ける疵瑕は、先輩の人に見てもらへば之を取除き、また直す事が出來る。想に於いては、之を全く取替ふることは出來るが、直すことは出來ぬ。語句ばかり大切にすると、造り花のやうな歌が出來る。いくら美しくても、何らの生命がない。初學の人はまづここを會得する事が大切で有る。

第二章　語句と調

前段に、歌には想の大切なことを述べたが、歌はまた言語文字の上に現はされて、初めて歌となるのであるから、實際の場合では、その表現を除いては歌が無いので、隨つて表現の方法といふことが必要となつて來る。實際想といふ事と、表現といふ事とは、歌では決して區別は出來ないので、我々が一首の歌を作る時にも、まづ想成つて、後に之を語句に現はすといふよりも、想が成ると同時に、形が成つて來るといふのが當然である。前段に想を重んずべしと言つたのは、想と表現とを二つに分けて見ての上である。

歌の形は、語と句との二つから成立つてゐる。語とは言ふまでもなく、種々の名詞動詞等の詞で、句とはその語を繋ぎ合せて出來たもの、五言と七言との二つの句である。この二つの句が五七、五七、七といふ形に連なつて、其處に歌の形式が出來る。卽ち歌は、五言七言の二句を繋いだ三十一文字の形式から成立つてゐる。これが短歌の體である。

ここに一言注意しておきたいのは、上句下句のことである。古くから五七五の三句を上句といひ、七七の二句を下句といつて、上下二句から一首の歌が出來てゐるやうに考へられて居るが、これは歌の歷史からいふと、古今集後のことである。

始は歌は五七といふつづきあひ、卽ち五七、五七、七の三聯から成つて居たので、特に第三句で切ることはゐなかつた。これが萬葉集までは、一般に定まつて居た形で、それまでは特に上句下句の別は無かつた。ところが平安朝の初から、歌のつづきあひが變じて、五七が七五となつた。それで(五)七五、と切れて、七七が別に獨立した一句となり。そこで上句下句の形となつたのである。

昔を偏へに貴ぶ人は、上句下句のわかちを三句切というて排斥し、今でも五七、五七、のつづきあひで歌を詠まねばならぬといふが、必ずしもそれに及ばぬ。上句下句の二句から一首を組立てるのもよい。また本來の五七調で詠むのもよい。

これらは兩方ともよいので、決して一方をのみ取り、一方を捨てるには及ばぬ。これは初めから注意しておく。これから語と句と調、及び姿といふ事に就いて述べる。

所謂歌言葉といふことは昔からいはれた事で、兎角歌に志す人は、詠歌に入る難關を、初からここに置いて居る。歌に詠んで見ようと思ふやうな考は度々おこるが、どうも歌言葉を知らないからといつて、億劫がるのはよく聞く所であるから、それに就いて一言しよう。

歌には歌言葉はあるが、併しそれは決して初から極つたむつかしいものでは無い。段々詠んでゆく間に、自然と學び得

らるべきもので、本來からいへば、どんな詞で詠んでもよいものである。歌に志して、他人の歌などを少し讀んで居れば歌をよむ口付は誰でも大抵わかつて來る。整はないところなどは追々なほつてゆく。歌語は決して始から用意してかからなければ打破れないやうな難關では無い。少し詠んでゆく間に自然にわかつて來るものである。

これは、これから歌に入らうとする人の爲に言つたのであるが、已に多少歌の道に入立つた人の爲にも言ふべきことが多くある。

それは第一に歌といへば、兎角古語を使ひたがつて、新しい語を排斥しようとする謬見である。歌は決して古人の用ゐた古語にのみよつて詠むべきでは無い。否、想を新しく廣くしようとする必要上、語もまた廣く之を求めて、自由に使はねばならぬ。歌には漢語や俗語は一切斥けたのが古來の例であるが、歌の本來の性質上から、夫等は必ず斥くべきものと言ふのではない。理想としては歌語はあくまで自由であるべきである。萬葉時代の歌人は言ふまでもなく、其後の歌人の中にも、獨自の見識を有した人の中には、當時一般の歌人の間には、用ゐられなかつた漢語や佛語や俗語などを用ゐた人もある。

併し新しい語を斥くべきで無いといつたとて、殊更に俗語や新熟語を入れて、新奇を衒ふのはよくない。歌は勿論談話

と同じくは無い。どこまでも歌らしいといふ事が必要である。それならばどういふのが歌らしいかといへば、それは特に其語を入れた爲に、一首の調和を敗るといふやうな事が無く、却つて其爲に特別の趣を生じて、讀む人に歌らしい快い感を與へると言ふ事である。この以上は經驗して自得すべきである。要するに餘り歌語などいつて、窮屈がる事も無い。又殊更に新語や俗語を入れるにも及ばぬ。只歌らしいと云ふ點を忘れずに心がけて、自由に語を用ゐればよい。而して特に平生注意して多くの語を記憶し、語彙を豐かにしておき、其時に臨んで、それに相應した語を自由自在に驅使し得る樣にならねばならぬ。殊に從來の語の中にも、印象の明らかな語を選んで用ゐるやうにしたい。其爲には多くの古語の精確な意義と、用例とに通ずる必要がある。而して之等は多く讀み多く作つて居る間に注意さへして居れば自得されて來る。

舊著ではあるが、自分の編纂したものに、

詠歌辭典

といふ書が有る。初學の人々が歌語に就いて知るためには、多少の參考にならうと思ふ。

第二が句である。語を五言七言に續ければ、歌の句は出來るので、之に就いては別に言ふことは無いが、只一言したいのは字餘りの句である。五言七言といふものの、往々にして五言の句が六言七言になつたり、又は七言の句が八言九言に

なつたりした歌もある。否、古くは五言の句に四言、七言の句が六言のもある。併し今日の歌の句としては、語數の少ないのは古體として、學ぶべきでは無い。多い方は所謂字餘りであいうおの語の含まれてゐる場合はよいとされて居るが、これは要するに、よみ下した調子さへよければよいと言ふことで、必ずしもあいうおと泥まぬがよい。字餘りは巧に用ゐれば意味を助け、感じを添へ得る。これは段々自得される。殊に莊重な感を與へたり、のんびりした長閑な感を與へたりするのに、字餘りを用ゐて成功した例は古歌に多くある。例へば、

今朝のあさけ雁がね聞きつ春日山もみぢにけらし吾が心いたし（萬葉）

年ふれば齡は老いぬ玄かはあれど花をし見れば物おもひもなし（古今）

春は猶花の匂もさもあらばあれたゞ身にしむは曙の空（千載）

わたつうみの波間かきわけてかづくあまの息もつきあへず物をこそおもへ（讃岐）

ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉ふきおろす山おろしの風（新古今）

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふたごころ我あらめやも（實朝）

天の原ふきたゞよはす秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり（伊能魚彦）

第三に吾人が說かねばならないのは、歌の調及び姿といふ事である。歌は語句から成つてゐる。語句をはなれて、勿論調も姿もないが、語句をつづけて三十一字一編の歌が成立つた所に、別に調または姿といふものが存して居る。

姿と言ふことは、中世の歌學で盛に說かれた。氣高い姿であるとか、おだやかな姿であるとか、種々に言はれた。調といふ事も古くから言はれたが、近世香川景樹が出て、「歌は調ぶるものなり」と言つて、調が歌の生命である事を言つた。

歌には個々の語句が大切であると同樣に、否むしろそれ以上に、全體としての調を考へることが大切である。個々の語句に就いては、何等の非難もない歌でも、一編として讀み下してみると、何となく不足な所のある歌は多くある。

それは何の爲であるかといふと、一編の上に調和が缺けて居るからである。其爲に、部分として立派でも、全體として間延びがしてゐるのである。初學の人が作例にすがつて詠んだ歌によく斯ういふのがある。

調和と言ふ事は、歌の上に極めて大切なことである。歌の調を整はしむる上に必要な調和といふのに二つある。一つは個々の語句の調和で、二つは想と形式との調和である。此二つの調和が完全でないと、歌は決して完全な作品たる資格を有し得ない事となる。

第一のものは、言はば語句のつづけからと言ふことである。

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

といふのは、業平の作で、有名な歌であるが、これが若し、

世の中にたえて櫻のあらざらば春の心やのどけかるらむ

と作られたとする。その各句に於いて、原歌と意味も殆ど

違はぬし、又各句一つ〳〵取り出して、何の非難すべき所が無い。併し詠み下してみて、前者ののび〳〵してのどやかであるのに、後者の窮屈な所があつて、何となく物足りない事は、誰でも感ぜられる。これは「あらざらば」と、「……やのどけかるらむ」といふ語句が、其他の句ののんびりした趣と調和しないからである。

夕されば海上がたの沖つ風雲井に吹きて千鳥なくなり

といふ眞淵の名歌を、

夕まぐれ海上がたの沖の風み空にふきて鳴く千鳥かな

としたらば如何。こは全體の調和といふことを無視して居る事となつて來る。

斯かる弊に陷らざらむ爲には、實際歌を作る時に、一つ〳〵の語句に拘泥して仕舞はないで、常に全體から讀み下してみるといふ用意を忘れず、かつ古語の調子を自得すると云ふ外は無い。併し之丈けの用意を以て詠んでゆく中には、自然わかつてくる。

第二の、想と形式との調和といふ點は、作歌上の極めて大切なところである。武人が婦女の裝をしたらば如何。佳人が武夫の服を着たらば如何、何人もその不調和を感ぜざるを得ぬ。優美な想を言表はすに雄壯な調でしたり、優美な言表しかたで雄大な想を歌つたりしては、決して人を感ぜしめる事が出來ぬ。歌に於いては、想と姿とが相卽不離の關係に有る

べきものだけに、此調和が微妙で、甚しい不調和を、實際詠歌の上になす事は有り得ないと共に、又完全な調和を得てくる事が中々むつかしい。古來の名歌といはれるものの多くの生命は、殆ど凡てここに存する。

玉島のこの川上に家はあれど君を耻しみあらはさずありき

と言ふ萬葉の歌をよむと、可憐な少女の羞恥の情が、一篇一句に漲つて、全體として些の不調和の感なく、一種のまとかな美しさをおぼえる。第三第五の句の字餘りの如きも、極めて活きて用ゐられて居る。

もののふの矢並つくろふ籠手の上に霰たばしる奈須の篠原（實朝）

おぼつかなおぼろ〳〵と吾妹子が垣根も見えぬ春の夜の月（景樹）

の如きも、一は強く、一は優しいが、いづれも想と調との調和のよい例である。

調とは以上の如きもので、即ち一首の調ひ、換言すれば調和である。此調和の調ひ方の上に姿が存する。どういふ風に調和されて居るかと言ふ所に、樣々の姿が存するので有る。

姿といふ事をやかましく說いたのは、中世の歌學である。中世の歌學を代表する定家が、和歌十體として說いた所は、和歌の姿を調子の高い長高樣とか、強い拉鬼體とか、美しい麗樣とかに分けたもので、其分類の標準は、單に語句とか、調とかいふにのみ止まらず、自然、內容想の上にも涉つて居る。元來歌の想と語句や調べとは、決して離し得るもので無

いが、それ〴〵其想の如何に應じて、姿の上にも「雄健なもの」「優美なもの」「自然單純なもの」「複雜巧緻なもの」「幽玄なもの」「輕妙なもの」などの種類が擧げられる。是等の姿に就いては、吾人は想の方面に於いて、廣かるべく、狹かるべからざることを說いたと同じく、それに應じて、一つに拘む事なく、種々の姿を詠むべしと主張するので有る。景樹が調と言つたのは、主として優美を意味して、調の整のつた歌と言ふのは、景樹では、優美な姿と言ふ事と、殆ど同一で有るやうな觀をなして說かれた。卽ち景樹の歌の姿に對する考は、優美と云ふ一面に限られて居た嫌が有る。斯ういふ考は、今でも往々人々の間に見うける所で、歌といへば、優美な語句、優美な調に殆ど限られてゐるやうに解し、その考で歌を詠む人は少くないやうである。たかし之は調と云ふものを狹く解し、隨つて姿といふものを狹く解した偏見に過ぎぬ。想は廣いもので有る。其想の性質に應じて、優しきは優しく、强きは强く、その他それ〴〵に言表す所に、それ〴〵に調は存する。隨つて歌の姿は、想の赴く所に應じて、樣々で有るべきである。和歌に志す人は、和歌の姿は優美に限られて居ると言ふやうな謬見に、始から囚はれて了はない事が必要である。併し定家も言つた事ではあるが、人とり〴〵に其得意とする姿の有るのは言ふまでも無い。隨つてその得意の方面に發達するのは自然の事で、又特に得意の方面をとらへて、その方

面に主として、努力するのもよい。併し始から和歌の姿の樣樣ある事を忘れて、一つに囚はれて了ふ事は、絶對に避けねばならぬ。

第三章　文法と修辞

文法及び修辞の一々に就いて、ここに委しく説く必要は無い。それは一般の修辞書、もしくは文法書に讓る。唯吾人はこの方面に就いて、いささか作歌の上に、心得となるべき點を、注意しておかうと思ふ。

修辞とは、語句を美しく修飾する事で、文法とは、語句の間に存する一定の掟に隨つて、正しく文字を使ふ事で有る。

和歌は文學であるから、原則として文法を正しく守らねばならぬ。作者の無學に基づく亂暴な語づかひや、破格な語法は、到底完全な歌に於て、許すべからざるものであるのみな

らず、我が國の語は、てにをはの用法が微妙なものであつて、一寸間違ふと大變な意味の相違を來す。例へば「ありなむ」と「あらなむ」、「まし」と「まじ」、「ず」と「じ」等、相似てそれぞれ意味が違ふのであるから、文法を明瞭に知つてゐると言ふ事は、和歌を詠まむとするに、最も必要な事で有る。殊に動詞の活き、てにをはの意味、動詞とてにをはとのつづけ方、また係結の關係などは、十分精しく知つてゐるを要する。それで初學者の爲に、その研究に必要な參考書を擧げよう。

文法の書は、近頃に至つて良い本が續々出來てゐるが、詠歌の爲の目的には、第一に、舊時代の著ではあるが、

詞の玉の緒　本居宣長著

を推奬したい。これは殊に八代集から證歌を引いて、樣々のてにをはの用法や、意義が說いて有るから、便利で有る。而してそれと共に、文法の大體を知るには、大槻文彥博士の

廣日本文典　同別記

がよいと思ふ。

修辭とは、讀者に感じを深く與へようとの目的で、語句を樣々に修飾する法である。明喩法隱喩法以下、樣々の譬喩法、また語句の上に、種々修飾を施した懸詞緣語、調子の爲に用ゐる枕詞等の修辭法は、いづれも和歌の上に用ゐられて、和歌の美しい表現の要素と成つてゐる。その例を二三擧げよう。

世の中を何にたとへむ朝びらき漕ぎいにし舟の跡なきごとし

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすきものにぞありける

これは直喩法とか、明喩法とか言つて、如しといふ意を、（或はあらはし、若しくは省いては居ながら）、表面に表した譬喩で有る。之に對して、

皆人はよしの〻山の櫻花をり知らぬ身や谷のうもれ木

世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

の如きは、如しとか、似たりとかいふ比較譬喩の語を、表に用ゐずして、隱して居るので、隱喩法といはれる。大體から言へば、隱喩の方が直喩よりは、修辭として進歩して居て、後者の散文的なのに比して、韻文的で有る。併し直喩の方には、また自然卒直の趣が有るから、自然を尊んで、技巧を斥ける必要のある時には、直喩を用ゐた方がよい。萬葉古今には直喩が多く、新古今及びその前後の集には隱喩が多い。

擬人法の例も多くある。

今日といへば唐土までも行く春を都にのみと思ひけるかな

花もまた別れむ春を思ひ出でよ咲き散るたびの心づくしを

斯かる譬喩法を用ゐる事が、詩趣を增す上に功果の多い事は言ふまでもないが、注意すべきは、わざとらしさに陷らない事で有る。併し、その譬喩のとりかたの奇警である爲に、一首に奇拔輕妙の趣をあらしめる事も有る。近世の歌人で、擬人法を巧に用ゐた大隈言道の歌に、かういふのが多い。

聲喩とは、或は一編のうちに同音を重ねたり、同言を重ねたり、同句を重ねたり、また想を聲調の上に現はしたりしたので有る。

吉野なるなつみの河の川よどに鴨ぞ鳴くなる山かげにして

これは音を重ねたもので、「な」と「か」との音が繰返し用ゐられた所に面白みが有る。

月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず

これは言を重ねた例である。

秋も秋今宵も今宵月も月ところもところ見る君もきみ

こは同形の句を重ねたもので有る。所謂對句の句法もこの種に屬する。

また想の趣を、一首の聲調の上に現はしたものが有る。例へば

大海の磯もとどろに寄する浪われて碎けて裂けて散るかも（實朝）

の如きも、注意すべき修辞法で、前章に述べた想と形式の調和とも考へられる。下句の切迫した烈しい調が、波の荒磯に打よせて、碎け散る趣とよく協つて居る。

元來譬喩法は、修辞の主なもので有る。譬喩法を用ゐるのは、人の心に聯想を起させて、情趣を豊かにも、強くもせしむるを目的とするので有るから、譬喩法の大體どんなものであるかを知つておく事は、歌を詠む上に必要で有る。併し歌は修辞の法則に隨つて作るべきものでは無い。これらの譬喩法

を活用するはよし。之に囚はれてはならぬ。或る想を敍べるが爲に、譬喩法を用ゐるはよし。譬喩に使はれて、想の自由の發表を縛られてはならぬ。此弊に陷つた歌は、生命の無い人形のやうなものとなつて了ふ。これは單に譬喩のみでない、一般の修辭文法上に於いてさうで有る。

枕詞、懸詞、及び緣語は、和歌特有の修辭とも言つてよい位である。枕詞は極めて古い時代の歌から用ゐられたが、懸詞緣語等は、古今集以後、和歌が修辭的發達の域に達してから、盛に用ゐられるやうになつた。

枕詞は、眞淵の冠辭考に載せられただけでも、三百廿二あるが、其中一般に使はれたのはさう多くない。枕詞とは「足引の」山とか、「とりがなく」東とか云ふ類で、そを歌に用ゐた例は、擧げるに遑ない程である。

懸詞は、言かけともいふ。一つの語に、二つの意味を言ひかけたもの、

都いでて今日みかの原いづみ川かは風さむし衣かせ山（古今）

の如く、古今以後の歌に盛に用ゐられた。

緣語は意味の關係のある詞を、一首のうちに幷べ用ゐて一首の主意以外に、修辭上の巧を示すものである。例へば、

から衣きつゝなれにしつましあれば、はる〳〵來ぬる旅をしぞ思ふ（伊勢物語）

の如きで、これも中古以來盛に用ゐられた。

枕詞も餘り耳遠いものは用ゐない方がよいが、さうでない

のは、今でも用ゐて、歌の情趣を増す功がある。之は、その用ゐられ始には、やはり譬喩の用をなして居たのであるが、後世に至つてから、意味は無くなつて、唯調子を助ける用をなすに至つた。例へば、「、、、、、山こえ野こえ春の日を」と云ふ二句が浮んだ時、初句に別に言ふべき事がないと言ふ場合などに、「足引の」とつけたりするので有る。併し枕詞を用ゐるにも、全體の歌の情趣から考へる事が必要である。一體枕詞は古風なものであるから、極新しい思想を詠んだものなどには用ゐないのがよい。又充實した複雜な思想を、歌つたりする場合には、斯かる無意味の遊んでゐる句は、避けるのがよい。

かけ詞や縁語も多く用ゐぬ方がよい。殊に特に技巧を弄したあとを見せるやうに用ゐるのは、避けねばならぬ。用ゐるにしても自然であつてほしい。

修辭法の大體を知る爲には、修辭學の書を讀むを要する。近頃出來た書では、

修辭學　大和田建樹氏著
新美辭學　島村瀧太郎氏著

なとがよい。前者は簡單で、後者は詳細で有る。初學者の爲には前者で十分で有る。元來文法もさうであるが、修辭法は殊に實際の作歌の間に、自然に呑込んでゆくべきで、初め

から煩鎖な規則を知つたところで、作歌の上に益は少い。只斯ういふものであるといふ事だけは、知つておかねばならぬ。此意味で、簡單なものでよいと言ふので有る。

文法と和歌とに就いては、なほ一言して置きたい事がある。前に述べた如く、文法は苟くも文字で自分の考を發表しようとする以上は必要で、隨つて和歌の上にも必要であるが、併し和歌に於いては、決して文法に拘泥してはいけない。

今の文法の法則は、多くは平安朝時代の文章に存した掟で有る。文章が變遷すると共に、文法も變遷する。和歌はもとより口語では無いから、大體に於いては古文の法則に倣ふべきで有るが、併し時によれば、隨分古文の法則を破つてもよい自由を有して居ることを忘れてはならぬ。

また和歌には美的に言表す事が、第一に必要で有るから、其爲には、時には正確といふ事をも犧牲にせねばならぬ折があるのを忘れてはならぬ。之は昔の歌人も知らなくは無かつた。ある人が、景樹の、

わけてこそ見むと思ひし筥崎の波間にかすむ松の村立

の歌を難じて、「見めと思ひし」とあなければ、文法に違ふと言つたら、ある人が辯護して、見めと言つては調がわるい。之は「見む」でなければならぬと言つた。此反駁はよくこの意味を語つて居る。文法とか語格とか言ふ事に拘泥して、和歌

の語句の自由を束縛する説は、往々聞く所であるが、之は和歌の第一の性質が、美しく發表すると言ふ事にあることを忘れた偏見、かつ思想の自由を古格で縛らうとする、換言すれば、想を格の奴隷としようとする謬見である。殊に初學の者にとつては、寧ろ細かい文法の規則などに初めから縛られなくて、自由に大膽に、思ふところを發表するといふ心掛が大切である。それで習つて行くうちに、段々文法をも心得、その大體の法則の中で、其法則を活用して、思ふ所を自由に歌ひ得るといふ境に達すべきで有る。

修辭も、はじめからそれに使はれ、それを唯一の目的として歌を詠むといふ弊に陷るを、避けなければならぬ。掛詞や縁語などを弄して、一寸巧みな言廻しをして、それでよい歌を詠み得たとなすのは、往々初學の人の陷る弊で有るが、歌とは決してそんなものでは無いので有る。

文法や修辭は、何處までも活用すべきもので、束縛せらるべきもので無い。文法を知つて、穴探しに陷らぬやう、修辭を學んで、語句の虚飾にならないやうの用意が必要で有る。

要するに、文法や修辭法は、一わたり知る必要は有るが、餘り深入りして、束縛されないやうにしなければならぬ。多く詠み多く作るうちに、自ら活用し得るやうになつてゆかね

ばならぬ。文法や修辭に就いて、全然知らないでは、無論それが出來ないから、その準備として、不十分でないだけは、文法や修辭法に就いて知つておく必要が有るのである。

結論

以上二篇七章にわたつて、吾人は和歌の入門を記し畢つた。勿論和歌の事は、他の同種の學藝に於けると同じやうに、到底十分に說明し盡し得るもので無い。自分で實際作つて見て、初めて解るといふ事が多いので有る。吾人の入門を讀んだだけで、自然にすぐれた和歌が作れるやうになる事を望むわけにはゆかぬ。併し吾人がここに述べた所を手引として、歌集を讀み、十分に心を用ゐて萬事萬物を觀察し感味し、以て歌心を養ひ、さうしてなるべく多作してゆく時には、やがて和歌の門に入り、堂に達することも難くないと思ふ。而して十

分和歌を解し、和歌を詠み得るに至つて、眞に和歌を樂しむ境に達し得ると思ふ。

最後に吾人は和歌の樂しびといふ事から、敎養としての和歌の價値と言ふ事に就いて所感を記して、此入門の筆を終らうと思ふ。

和歌は決して老人の消閑の具では無い。又婦女子の玩物では無い。男でも、女でも、若い人でも、老いた人でも、我が國民の凡てが學んで有益なる、隨つて出來るだけ一般の國民の間に普及せしむべき文藝で有る。

有益であると言つたからとて、必ずしも風敎の上に益があるとか、學問の上に益があるとか言ふのでは無い。勿論「たけきものゝふの心を和らげ」とやうに言つて、只管歌が風敎の上に益があるとなし、之を以て和歌の本務であるとあたり甚だしいのは、和歌は道德上の方便であるといふ風に考へられた事も有る。實際和歌が人心を和らげる功のある事は事實で有る。併し自分はこの風敎の具で有るとか、無いとか言ふ事で、和歌を學ぶ事の益であるか否かを言ふのではない。また和歌は勿論文學であるから、これを學ぶ事は文字の使ひ方を知つたり、古書を讀む力を養つたりする上に益がある。之は明らかな事で有るが、吾人が此處に言はうとするのは、必ずしもそれでは無い。

何の爲に和歌を學ぶかといふと、高尙な樂しみを味ふが爲

と答へたい。人間は樂しみなしには生きて居られない。名利に齷齪して、機械のやうに活いてゐるのみが、人のつとめでない。如何なる職業に携はり、如何なる階級にある人を問はず、高尚な文藝を樂しみたいといふ事は、如何なる人にもあつて欲しい。否、之は人の人たる特質の一つであるとも言ひ得よう。勿論文藝と言つたとて、和歌一つに限るのでは無いが、和歌は其中でも、我が國民にとつて、最も普通な性質を持つてゐる。且つ小説とか、繪畫とかいふものに比して、何人も入り易い。かつ小説や繪畫は、之を解し得、もしくは鑑賞し得らるるが、之を作つたりかいたりするのは、中々容易でない。而して眞の文藝の樂しみは、單に他人のなした所を味ふだけでは不十分で有る。どうしても自分でしてみなければ、眞にわからないので有る。

和歌が人々の高尚な樂しみであるからと言つて、それが何の益になると問ふ人があつたらば、それは殆ど無意義な疑問で有る。人間が利益の爭奪にのみ生きて居たら如何。我々は種々な世界に生きてゐる。我々が目の前にのみ見るやうな生存競爭の世界も有る。道德の世界もあれば、又趣味の世界も有る。只衣食に勞するだけが人間の能事であつたら、人間は動物と多く異るところは無いであらう。殺風景な人生に趣味あらしめ、榮あらしめるものは文藝の世界で有る。文藝の世界の樂しみを解しない人は、完き人では無い。人間らしい人

間では無い。吾々は天分や才分によつて、種々の方面に働いてゐる。併し人間として、誰しも高尚な趣味を解して居らねばならぬ。星も輝やかず、花も咲かない世界は、如何に殺風景であらう。美に對して目しひ耳しひた人の心は、如何に憐れむべきものであらう。歌を解さない人の心は如何に殺風景で、又あはれであらう。

和歌を解するのは、人生の最も高尚な樂しみなる文藝の味ひを解する一つの道で、殊に我が國民として最も適當な、又入り易い方法で有る。吾人は和歌が益々普及されて、我が國民の心が益々文藝的に開發されてゆかむ事を希望する。凡ての家庭に和歌を普及せしめよ。凡ての階級に和歌の趣味を解せしめよ。かくて美しい和歌の世界の建設されるに至つたら、以て國民趣味性の開發ともなり、其開發された土壌を畑にして、美しい大文學の花も咲き出づるであらう。

併し和歌は、單に大きな文學の花を開かせる下地たる役目を有して居るのみでは無い。和歌を學ぶと言ふ事だけで、我我の心を眞に樂しませ、我々の心を眞に安んじさせる功が有る。それは和歌がまた一つの立派な文藝で有るからで有る。

西行は我が國の生んだ最も大きい歌人の一人で有る。彼が天地の美にあこがれて、和歌の世界に安住した心持を思ふと我々は羨望の情に堪へない。西行の歌に就いては、吾人は已に述べたが、彼が月や花の美にあこがれて、殆どそれと同化

した心持は、誠に文藝の極致で有ると思ふ。隨つて又人間が人間としての生活の一面を敎へて居ると思ふ。勿論西行が世中に對して抱いて居たやうな、消極的な厭世思想を吾人は推奬するのでは無いが、あの自然の美を樂しみ、歌の世界に眞の樂しみを味つた心持は、人間として何人も持つて居なければならぬ所であると思ふ。人は樣々の境遇に生き、樣々の性質を有して居て、隨つて人樣々に、絶ず飽き足らない所を以て、希望を實行しようとして居る。ここから樣々な努力も起り、樣々の活動も生ずる。併しその一方に、人は、絶ず其うちに樂しむと言ふ心持がなければならぬ。之が心のゆとりで有つて、趣味の世界はここに存在して居る。西行が和歌に樂しんだ心持は、此間の消息を我々に最もよく敎へてゐる。人としてほど〳〵に斯樣な心持はあつて欲しい。否、無ければならぬ。此處に至つて、和歌は單なる文藝以上のものとなつて來る。吾人は此入門によつて、和歌を學ばうとする人々が、此道に入立つに隨つて、かかる邊にも思をいたされむ事を希望して、此筆を擱く。

和歌入門 終

附錄

歌題と作例

題詠と歌題とに就いては、本書第二編第一章に之を論じたが、その附錄として左に初學の人が詠み習つて行くに適當な題目と、その題目を詠んだ古人の秀逸を三首づつ添へて置く。一々の題について、諸君が詠み出られる際に參考として讀まるるも可し。また平生吟誦して歌想を養はるれば益々可い。但しここには專ら明治初年までに屬する古人の作を載せたので、新事物の歌題、またそを詠んだ歌は載せることを去なかつた。新しい事物でも、之を詩化して詠み得るものは、凡て歌題となし得ざるものは無いが、その

初春

四方の海浪をさまりてのどかなる我が日の本に春は來にけり　龜山院

さし出づるこの日のもとの光より高麗唐土も春を知るらむ　本居宣長

皇神の天降ましける日向なる高千穂の嶽やまづ霞むらむ　伊能魚彦

春霞たなびきにけり久方の月の桂も花やさくらむ　紀貫之

ともすれば琴ひきさしてうち霞む窓の外山の眺められつゝ　幽眞

鶏の音は小坂の村に明けそめて霞をぐらき東雲の道　井上文雄

霞

ともし火の殘れる窓はあけやらで竹のうちなる鶯のこゑ　耕雲

かげろふのもゆる春日の小松原うぐひす遊ぶ枝うつりして　上田秋成

鶯のなく聲きけば古里を出でにし春に又なりにけり　熊谷直好

鶯の鳴けどもいまだふる雪に杉の葉白きあふ坂の山　後鳥羽院

若菜つむ衣手ぬれて片岡のあしたの原はあわ雪ぞ降る　源實朝

春の雪あがきに碎き信濃なる菅の荒野の駒いさむなり　上田秋成

梅

さらぐしさらけたる夜の月影に雪かき分けて梅の花折る　凡河内躬恒

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る　紀友則

柴の庵によるく梅の匂ひ來てやさしき方もある住居かな　西行

柳

春風の霞ふきとく絶間よりみだれて靡く青柳のいと　殷富門院大輔

遠く行く人を送りてやすらへば堤の柳うち霞みつつ　木下幸文

さし柳さしていく日も經ぬものを根ざし引見る友わらはかな　大隈言道

若草

父子ぐさ母子ぐさおふる野邊に來て昔こひしく成にけるかな　香川景樹

露ぬるき春の小雨の朝あけに淺茅がかれ生下青むなり　原久胤

かげろふのもゆる荒野のあら駒もうら若草に馴るゝ頃かな　荷田蒼生子

土筆

ふまるゝも今かと思ふ春駒のひづめがもとのつくくしかな　大隈言道

春の野に花の言の葉かきつくし誰が捨て置きし筆にかあるらむ　八田知紀

鳩の杖つくぐ見れば昔我が土筆つみつる野邊にぞ有ける　行誠

歸雁

霞みゆく夕べの雲のたえ〴〵に古里おもふ雁ぞ鳴くなる　俊成卿女

櫻さく渚のまとゐさ夜ふけておくれし雁の聲ひびくなり　加納諸平

いそぎても歸る雁かな越路には櫻にまさる花や咲くらむ　柳原安子

燕

つばくらめ簾のそとに數多見えて春日のどけみ人影もせず　花園院

すく〳〵と生ひ立つ麥に腹すりて燕飛びくる春の山はた　井手曙覽

つばくらめ親待ちわびて並べれば我も遲しと見る軒端かな　大隈言道

椿

河のへのつら〳〵椿つら〳〵に見れども飽かず巨勢の春野は　春日老

月てればつら〳〵椿その葉さへ皆玄ら玉と見ゆる夜半かな　香川景樹

窓近きまがきの椿花ごとにあなたむきても咲き出づるかな　野村望東尼

雲雀

うら〳〵に照れる春日に雲雀あがり心かなしも獨し思へば　大伴家持

霞たつ春野の雲雀なにしかも思ひあがりて音をば鳴くらむ　賀茂眞淵

枝高み折らで我が來し山の端の花より上に雲雀なくなり　石川依平

野遊

思ふどちそことも知らず行き暮れぬ花の宿かせ　藤原家隆

野邊の鶯

春の野のうかれ心は果もなしとまれといひし蝶はとまりぬ　香川景樹

鶯のさへづる野邊のいづこまでさそはれわたる心なるらむ　中島廣足

桃

春の苑くれなゐ匂ふ桃の花下てる道に出で立つ少女　大伴家持

春の水淺くながるる片岸は桃の林の山もとのさと　上田秋成

少女子に折やつされてはゝこ摘む野川の桃の色ぞ寂しき　井上文雄

花

櫻狩雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花の蔭に隱れむ　作者不詳

去き去まのやまと心を人問はば朝日ににほふ山さくら花　本居宣長

春の日の長きを時と咲きそめし神代うれしき山ざくらかな　石川依平

たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり　藤原因香

櫻花ちらば散らなむ遠つ神我が大君のきぬがさの上に　加納諸平

おもふにはまかせぬ春の山風に今年も早く散るさくらかな　行誠

菫

いそのかみふりにし人をたづぬれば荒れたる宿にすみれ摘みけり　能因

昔見し妹が垣根は荒れにけりつばなまじりの菫のみして　藤原公實

春の色菫にのみぞのこりける片山畑の麥の中みち　木下幸文

蝶

ませに咲く花にむつれて飛ぶ蝶の羨しきもはかなかりけり　西行

ふし岩のつゝじがもとのいさら水夢を流して蝴蝶飛ぶなり　加納諸平

ともすれば散り行く花を送り來て蝶さへ蝶とあやまたれけり　大隈言道

菜花

春されば鈴菜花さくあがた見に君來ますむと思ひかけきや　賀茂眞淵

吹く風に動く菜の花音もなく岡邊をづけき朝ぼらけかな　大隈言道

なの花にあたら月夜の霞むかな蝶のふしども見むと思ふに　猿渡容盛

蛙

みくりはふ汀のまこも打そよぎ蛙なくなり雨のくれがた　藤原定家

川の邊の苗代ぐみも色づきて匂ふ夕日に蛙なくなり　千種有功

あらし山花の光も暮れ行けば戸無瀬のおくに蛙なくなり　亞元

躑躅

風早の三保の浦わの白つつじ見れどもさぶし亡き人思へば　作者不詳

ふふみつる籬のつつじ散りにけりあからさまにも宿りしものを　加納諸平

片岡の道の小寺のつつじ垣ほろ〳〵散りて人影もなし　井上文雄

山吹

蛙なく神なび川にかげ見えて今やさくらむ山吹のはな　厚見王

駒とめて猶水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川　藤原俊成

そなたには窓さへ無くて山里の家のそともの山ぶきの花　大隈言道

藤

藤波のかげなる湖の底清み沈く石をも玉とぞ我見る　大伴家持

なつかしき妹が衣の紫のにほひよろしき池の藤なみ　河津美樹

霞のみなびくと思ひし片岡の松の葉ごもり藤さきにけり　加納諸平

暮春

惜しめども春の限の今日の日の夕暮にさへ成にけるかな　作者不詳

暮れてゆく春の港は知らねども霞に落つる宇治の柴舟　寂蓮

漕ぎよせよ難波わたりに船とめて今宵ばかりの春を眺めむ　藤原隆信

春日

手もたゆく海士のたく綱春の日もつひには暮れぬいさり火の影　藤原家隆

音もせず春日のどけし時守の鼓や今日はうち忘れけむ　木下長嘯子

立並ぶ高嶺の檜原かげ暮れて霞に殘る夕づく日かな　村田春海

春月

ゆけど〳〵限なきまでおもしろし小松が原の朧づく夜は　香川景樹

春ごとにおもひぞ出づる昔見しいなさ細江のおぼろ夜の月　菅沼斐雄

思ふ子に別れてゆけば春の夜の月かげくらし倉敷の村　平賀元義

春風

白雲の絶間になびく青柳のかつらき山に春風ぞ吹く　藤原雅經

三島江や霜もまだ乾ぬ芦の葉につのぐむほどの春風ぞふく　藤原通光

醉ひみだれ花にねぶりし夢さめてさむしろ寒し春のゆふ風　安藤野雁

春雨

木々の心花近からし昨日今日世はうすぐもり春雨のふる　永福門院

緑そふ堤の柳うち去めり春さめかすむ夕ぐれの道　山名玉山

高野山こけのとぼそは靜にて音もきこえず春雨の降る　實雄

春曙

又や見むかた野のみ野の櫻狩花の雪ちる春のあけぼの　藤原俊成

朝日かげ豊さかのぼる日の本のやまとの國の春のあけぼの　佐久良東雄

夢もなく眠たらへる曙に霞む外山の花を見るかな　伊達千廣

春朝

櫻さく遠山もとにきぎす鳴きおぼろ月夜は明けはてにけり　原久胤

あけぬとも知らでや月の殘るらむ霞こめたる浦波のうへに　八田知紀

遠方のひとむら霞ほのぐと松になりゆく朝ぼらけかな　間島冬道

春夕

春されば木がくれ多き夕月夜おぼつかなしも山かげにして　作者不詳

山里の春の夕ぐれ來て見れば入相のかねに花ぞ散りける　能因

何となく恨み馴れたる夕べかなやよひの空の花のちる頃　藤原定家

春夜

おもしろき朧月夜にあくがれて盡みし花のかげを訪ふかな　千種有功

梅の花窓にうつりておもしろき今宵の月夜君をこそ思へ　平賀元義

二月のついたち頃の夕月夜心にくくも霞みそめつつ　間島冬道

春山

すが原やふし見のくれに見わたせば霞にながふをはつ瀬の山　作者不詳

去づみつる入日の際にあらはれぬ霞める山の猶おくの峯　藤原爲兼

志賀の山花に越ゆれば古への人も逢ふやとおもほゆるかな　千種有功

山もとや霞む木間をたえ〴〵に流れて出づる春の川上　正徹

もえわたる底の水草もあらはれて烟ながるる白河の水　八田知紀

里の子が若菜あらふと濁したる野川の水に春は浮びぬ　猿渡容盛

春海

那古の海の霞の間よりながむれば入日を洗ふ沖つ白浪　藤原良經

夕づく夜汐みち來らし難波江の芦の若葉を越ゆる白浪　藤原秀能

雁はなどやすらふ心なかるらむ松原かすむ住の江の浦　木下幸文

春野

冬ごもり春の大野をやく人は燒き足らぬかも吾が心燒く　作者不詳

春日野は今日ハな燒きそ若草のつまもこもれり吾もこもれり　作者不詳

ながめやる遠里小野はほのかにて霞にのこる松の風かな　藤原良經

春山家

たづねつる宿は霞にうづもれて谷の鶯ひと聲ぞ
する　藤原範永

山ふかみ岩もと小芹つみに出でてそをだに春の
去るしと思は　慈鎮

人は來でむなしき谷に水流れ花さく山の春ぞ靜
けき　元政

春田

里とほみいく野の末を見わたせば霞にかへす春
の荒小田　飛鳥井雅經

なづな咲く花の匂に暮れかねて霞にのこる春の
山はた　村田春海

小山田にすだく蛙の聲のうちに小雨ふりきぬ春
の夕ぐれ　清水濱臣

春旅

おもふどち春の山邊に打むれてそこともいはぬ
旅寢してしが　素性

もろともにめぐりあひける旅枕涙ぞそゝぐ春の
さかづき　藤原定家

いづこかはさして我が宿行きまじり野にも山に
も花の邊に寢む　安藤野雁

春鳥

葉がくれにめじろ囀る聲すなり椿まじりの春の
み山木　中島廣足

さまゞの鳥おもしろき夕花に又くはゝりぬひ
わの一むら　大隈言道

春雨にこぶしかつ散る山そひの小寺の垣根去と
ど鳴くなり　井上文雄

首夏

ここかしこ岸根のいばら花さきて夏になりぬる川添の道　木下幸文

よひ〳〵の卯花月夜ほとゝぎす田舍は早く夏めきにけり　井上文雄

繁りあふ新桑垣の枝たれて雨もるふかき夏は來にけり　間島冬道

新樹

幾代々の宮木に洩れて深山木の老木ながらに若葉さすらむ　加藤千蔭

巖きるつちのひびきに花ちりて青葉になりぬ白川の奥　熊谷直好

小鳥なく里の林の朝ぐもり音せぬ雨に添ふ綠かな　長澤伴雄

牡丹

ゆめにだに見ぬもろこしのかほよ人おもかげ匂ふ深見草かな　千種有功

たきものゝから木のませを八重ゆひて花も富たる殿づくりせり　加納諸平

梅さくらちりて若葉の庭の面に春ふかみ草今さかりなり　野之口隆正

杜字

いづ方に鳴きて行くらむ時鳥淀のわたりのまだ夜ふかきに　壬生忠見

やよや待て山時鳥ことづてむわれ世の中に住みわびぬとよ　み國の町

山深み杉の葉けぶりくもる夜の月に語らふ時鳥かな　菅沼斐雄

早苗

峰の松入日涼しき山かげの裾野の小田にさ苗とるなり　順德院

香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原さなへとるなり　上田秋成

賤の女がおり立つ小田の水鏡見るひまもなくとるさ苗かな　梶女

梅雨

さみだれは晴れぬと見ゆる雲間より山の色てきぬ夕ぐれの空　宗尊親王

あふち咲くそともの木蔭露おちて五月雨晴るる風わたるなり　藤原忠良

梅雨の雲間に見えて磯崎の松おもしろき夕日かげかな　神山魚貫

山かげやくらき岩間のわすれ水たえ〳〵見えて飛ぶ螢かな　藤原爲理

夕されば螢とぶなりおりたちて今日麥刈りし前のを畑に　神山魚貫

ただひとり眺むる宿の木がくれに心ぼそくも飛ぶほたるかな　柳原安子

撫子

あな戀し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ　作者不詳

ふる里となりにし小野の朝つゆにぬれつゝ匂ふやまとなでしこ　源實朝

夏川のくづるゝ岸の危ふきに生ひて咲きたる撫子の花　大隈言道

百合

かたぶきてたてるを見れば人去れず物をやおもふ姫百合の花　香川景樹

さみだれの雨今こそは晴れぬなれあかりて匂ふ姫ゆりの花　安藤野雁

折しもあれ殿のわく子が朝とでの庭の姫ゆり露こぼれけり　辨玉

蓮

はちすおふる池の汀にたたずめば衣匂はし清き風ふく　田安宗武

吹く風に蓮のたち葉のうら見えて花の香去めるる夕ぐれの雨　松平定信

池水の深き濁に去みてこそ花の姿も清くはあるらめ　誠拙

夕立

山高み梢にあらき風立ちて谷よりのぼる夕立の雲　藤原實氏

汐風のふきこす音も高師山入海くらき夕立の空　慶運

杣人も斧うちやむる夕立に岩きりとほす谷川のみづ　猿渡容盛

炎暑

行なやむ牛のあゆみに立つ塵の風さへあつき夏の小車　藤原定家

ほど狭きいほりのうちをそこ〻と所うつして日を避くるかな　原久胤

風ぬるく立てる大路の土けぶり暑かはしさの限なりけり　横山由清

蚊遣火

夕日かげ匂へる雲のうつろへば蚊遣火くゆる山もとの里　田安宗武

蚊遣火の烟にむせぶ緑兒が聲もいぶせき宿の夕ぐれ　小澤蘆菴

いづ方にたくともなくてかやり火のけぶりにくもる夕ぐれの里　中島廣足

夏の夜の月まつ程の手すさびに岩もる清水いくむすびしつ　藤原基俊

道の邊に清水流るる柳かげをばしとてこそ立ちとまりつれ　西行

夏の日のくれもてゆけば眞清水のます〳〵音の涼しかりけり　井上文雄

泉

納涼

風吹けば蓮の浮葉に玉越えて涼しくなりぬひぐらしの聲　源俊頼

片岡の楢の木かげの夕すずみ涼みてをれば月も洩れ來ぬ　千種有功

誰そ彼と分かず成ゆく橋の上に聲知る人のつどふ頃かな　大隈言道

夏日

六月の中の十日の中空にいとも畏こき日の御面かも　伊能魚彦

夏の日はいつも長居のまらうどをかへして後も猶長くして　井上文雄

五月雨のいぶせかりしも今更に戀しきばかり照る日かげかな　中島廣足

夏月

庭のおもはまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな　源頼政

夕立の雫まだ散る呉竹の葉ごしに見ゆる夏の夜の月　菅沼斐雄

そとの濱千里の目路に塵を無みすゞしさ廣き砂の上の月　井手曙覽

夏朝

今日も又暑さ知られて薄霧の梢にかわく朝ぼらけかな　原久胤

いつはあれど竹は夏よし夏は又朝こそ竹は涼しかりけれ　木下幸文

ほとゝぎすさやかになのる一聲にねざめ涼しき朝ぼらけかな　佐保民雄

夏夜

みづ枝さす葉廣くまを楓露ちりて月おもしろき夜半にもあるかな　加藤千蔭

もゆばかり見えし眞砂もうちきめり月夜となりぬ長濱の浦　八田知紀

竹村のすきまに見ゆる近どなり燈かげすずしき夏の夜半かな　原久胤

夏川

大井川若葉涼しき山かげの緑をわくる水の白なみ　賀茂眞淵

島つ鳥鵜やかづきけむ夏川の玉藻の花の今朝亂れたる　千種有功

川くまに紅ちりて水蓼の青葉ゑをるゝ夕づく日かな　加納諸平

夏海

曇なき大海の原を飛ぶ鳥のかげさへ玄るく照れる夏かな　曾根好忠

室の浦のせとの早船浪たてて片帆にかくる風の涼しさ　藤原信實

夕されば南の風に雲消えてみるめ涼しき沖のいさり火　小澤芦菴

夏山家

山里は夏かげ清し朝雲の袖よりおつる木々の白つゆ　飯田年平

岩つたふ清水涼しき山かげの葉がくれいほに住む人やたれ　蓮月

おのづから涼しき風も通ひけり假に結びし山かげのいほ　高畠式部

夏旅

我宿の花たちばないたづらに散りか過ぐらむ見る人なしに　中臣宅守

旅なれば思ひもかけぬ菖蒲草片しく袖にかをる夜半かな　熊谷直好

里の兒が機織る音もとだえして晝寢の頃の暑き旅かな　蓮月

初秋

庭草に村さめ降りてこほろぎの鳴く聲きけば秋づきにけり　作者不詳

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬なきて秋は來にけり　源實朝

賤が屋のむくげゆひまぜし竹垣にめじろ囀る秋のはつ風　井上文雄

七夕

秋萩に匂へる我が裳ぬれぬとも君が御舟の綱しとりては　阿倍繼麿

秋風の吹たたよはす白雲ゝたなばたつめの天つ領巾かも　作者不詳

近からば行きても見をしたなばたの稀のわたりの舟のよそひを　荷田蒼生子

夜のほどの野分も知らず咲きにけり窓に取入れし朝がほの花　柳原安子

朝顔

朝がほの花よりもろき身ながらにこん年さかむ種を取りつゝ（幽閉中作）　野村望東尼

夢は猶軒端にをよふあけぼのゝ露の雛にさける朝顔　近藤芳樹

薄

今よりは植てだに見じ花薄穂にいづる秋はわびしかりけり　平貞文

み吉野のとつ宮どころとめ來れば其處とも知らに薄生ひにけり　田安宗武

薄原尾花になりぬ夏飼の手がひの小鷹野邊いそぐらむ　加納諸平

萩

宮人の袖つけごろも秋萩に匂ひよろしき高をとの宮　大伴家持

こがら鳴く秋の野寺の一重垣ひを見えぬをで萩は咲きけり　加納諸平

さを鹿の渡り過ぎたる山水に散りて流るゝ秋萩の花　中島廣足

草花

月草に衣は摺らむ朝露にぬれての後はうつろひぬとも　作者不詳

いそのかみふりにし妹が家訪へば秋の花のみ匂ひてありけり　平賀元義

おとろふるうき世のさがの女郎花霜おくまでは殘らずもがな　鵜殿よの子

蟲

きり〳〵す夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかり行く　西行

夕日うすき枯葉の淺茅下すきてそれかとよわき蟲の一聲　伏見院

鳴つゞく道の長手の蟲の音に折々まじる水の音かな　木下幸文

露

樒つむ山路の露にぬれにけり曉おきのすみぞめの袖　小侍從

われも悲し草木も心いたむらし秋風ふれて露くだる頃　伏見院

我せこが朝けの姿朝つゆにぬれて歸らむ事をしぞおもふ　紅子

雁

秋の夜のほがら〳〵と天の原てる月かげに雁なき渡る　賀茂眞淵

松浦舟から櫓おしきる大伴のみつの港に雁なきわたる　香川景樹

去ばらくは都となりし津の國の武庫の浦わの初雁の聲　誠拙

野分

ただならぬ雲のけしきに門たててすゝまればこそ野分ふく風　上田秋成

おもと人半蔀おろす袖口のあらはなるまで吹く野分かな　井上文雄

一度は野分の風の拂はずば清くゝならじ秋の大ぞら　野村望東尼

月

落ちたぎち流るゝ水の岩に觸りよどめる淀に月の影見ゆ　作者不詳

白露を玉になしたる長月の有明の月夜(つくよ)みれどあかぬかも　作者不詳

昔見し人は夢路に入はてゝ月と我とに成にけるかな　藤原基俊

霧

君が行く海邊の宿に霧立たば吾(わ)が立ち歎く息と知りませ　遣新羅使人妻

明けぬるか川瀬の霧の絶々に遠方人の袖の見ゆるは　源經信母

見わたせば天の金山三野の山霧たちかをる雨ふらむとす　平賀元義

搗衣

かへるべき越の旅人まちわびて都の月に衣うつなり　藤原良經

淺ぢ原拂はぬ霜の古里にたれ我が爲と衣うつらむ　土御門院

櫻いろの妹がおもわに汗あえて力のかぎりうつきぬたかも　安藤野雁

百舌

ことゝもなき野邊を出でても見つるかな百舌が鳴く音のあわただしさに　香川景樹

走り出の紅葉の枝に小鳥まつ百舌が一聲さびしかりけり　井上文雄

賤の男が門の粟畑霧こめて百舌の音さむし秋篠の里　八田知紀

菊

ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千歳をわれは經にけむ　素性

いづくより駒うちいれむ佐保川のさざれにうつる白菊の花　香川景樹

菊かをる籬の下に醉ひたふれ南の山のからうたうたふ　井手曙覽

紅葉

おく山の岩垣紅葉ちりぬべし照る日の光見る時なくて　藤原關雄

千早ふる神のいがきにはふ葛も秋にはあへずつろひにけり　紀貫之

かた山の蔦はふ道を分けくれば巖も秋に成にけるかな　油谷倭文子

暮秋

花すゝき招く袂は數多あれど秋はとまらぬものにぞ有ける　清原元輔

つり舟の浮ぶ波路に月老いて人と秋との別をぞ思ふ　藤原定家

芦の花ちりのまがひに秋くれてゆふ風さむしてやの池水　石川依平

秋風

少女らが玉裳裾びく此庭に秋風吹きて花は散りつつ　安宿王

思ひかねわかれし野邊を來て見れば淺茅が原に秋風ぞ吹く（長恨歌のこゝろを）　源道濟

人すまぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風　藤原良經

秋雨

蘭省の花のにしきのおもかげにいほりかなしき秋のむら雨　藤原定家

草かげの松のかれ葉に秋見えてこぼれし雨いやや晴にけり　加納諸平

ゆふづく日入江の松にかげろひて名殘さびしき秋のむらさめ　蓮月

秋夕

さびしさに宿を立出でてながむればいづこも同じ秋の夕ぐれ　良遍

くれかゝる夕べの空を眺むれば木だかき山に秋風ぞふく　源實朝

霧の上に雁がね鳴きて秋の日のかたぶく空を一人かも見む　加納諸平

秋夜

かくばかり惜しとおもふ夜をいたづらに寢てあかすらむ人さへぞ憂き　凡河内躬恒

鈴蟲の聲ふりたつる秋の夜はあはれにものゝなりまさるかな　和泉式部

秋風に夜のふけ行けば久方の天の川原に月かたぶきぬ　源實朝

秋山

鳩の鳴く松の木立のうす霧に秋の日よわき夕ぐれの山　一條

山里のそともの岡の高き木にそゞろがましき秋の蟬かな　西行

かげよわき夕日は峯に入はてゝうす霧なびく秋風の山　小澤芦菴

秋海

松浦潟山なき西に行く月をはるかにひたす沖つ白浪　小澤芦菴

白雲に心をのせてゆくらくら秋のうな原おもひ渡らむ　上田秋成

ふけゆけば月すみわたりわたの邊の大江の岸に秋の風ふく　木下幸文

秋野

行きて見む暮れなばなげの宿りかゝまつてふ蟲の花に鳴く野を　契沖

武藏野を人は廣しとふ我は唯尾花分け過ぐる道とし思ひき　田安宗武

秋の野をめぐり〳〵て出ぬればもと來し道のちまたなりけり　神山魚貫

秋田家

よそ人は見馴れぬ里の一くるわ稻こきやめて我をゆびさす　井手曙覽

落栗をすびつに燒きて新玄ぼりのみつゝをれば月も出でにけり　井上文雄

秋をさめやゝ事はてゝのどかなるあがたの月夜ものさびにけり　横山由清

秋旅

人の國夜は長月の露霜よ身さへ朽ちにし床のふすまに　藤原定家

あづま路は衣手さむし白雲のあはゝが嶽の秋の初風　賀茂眞淵

はりま潟明石のと浪月てりて夜舟うれしき旅にもあるかな　八田知紀

初冬

江の南わか葉の草も緑にて春のかげなる神無月かな　藤原定家

刈殘す穂田の朝霧むすぼほれおぼつかなくも來たる冬かな　加納諸平

あられうつあらゝ松原風あれて冬めきわたる住の江の浦　木下幸文

時雨

春日野に時雨ふる見ゆ明日よりは紅葉かざさむ高圓の山　藤原八束

山深み落ちてつもれるもみぢ葉のかわける上に時雨ふるなり　大江嘉言

たづが音は雲にみだれて磯山の梢をそゝぐむら時雨かな　加納諸平

落葉

日くるればあふ人もなし正木ちる峯の嵐の音ばかりして　源俊頼

嵐ふく峯の木葉にともなひていづちうかるゝ心なるらむ　西行

有明の月ぞうかなる庭のおもに折々おつる木葉をぞ聞く　湧蓮

霜

山賤が煙ふきけむあとならし椿のまき葉霜に氷れり　加納諸平

朝日かげまだよくささで大船のかげの小舟に殘る初霜　大隈言道

やがてこそ消ゆべきものを霜の上に何しか人の跡のこすらむ　行誠

さま〳〵に花咲きたりと見し野邊の同じ色にも霜がれにけり　西行

枯野

うねの野の枯生の月に霜さえてたづが音さむき冬の夜半かな　石川依平

倒れたる薄くぐりて行く水の末もさびしき野邊の冬がれ　井手曙覽

木枯

おぼつかな木間に見ゆる三日月も散るばかりなる木枯の風　香川景樹

をはつせや峯の木枯末見れば檜原に聲のよわりぬるかな　原久胤

春といへば梅に柳に匂ふべき風かあらぬか木枯の風　猿渡容盛

寒草

津の國の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり　西行

かれにける草は中々やすげなり殘る小笹の霜さやぐころ　賀茂眞淵

霜氷る冬田の畔のつくも草かれぬ緑もさびしかりけり　石川依平